
学生時代 今までありがとう・・

山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学生時代 今までありがとう・・

【Nコード】

N7200R

【作者名】

山

【あらすじ】

メインキャラ

やまもとれんこ

山本連碁

たかはらはつゆ

高原初優

かきさかともき

夏季坂智樹

かなざきまこと

金崎真

リオ・リフィル

サブキャラ（時々出てくるキャラ）

かんさきかなこ
間先加奈子
あかさきれみ
赤崎糖見
おかさきまみ
岡崎真魅
コレット・ファラ
フRUNス・メディア
川崎 励 (かわさき れい)
リディア
ラファエル
ミーファ

数日後・・・（前書き）

また・・・短い文章になるかと思いますが・・・。
見守ってください・・・。

これは学生時代の続きです。

数日後・・・

この世界には魔法世界、天界、魔界などいろいろな世界が存在をした。数か月前までは山本連暮という天魔人だった彼が天界と自分の世界（無属性世界と言おう）いや・・・全世界を守ったと言えいいのか・・・。彼がいなかったら今の世界はもう戦争になってただろうに・・・その数カ月後のこと・・・

現在朝6時俺は朝起きてランニングをしていた。もう習慣と言えばいいかな？

前に鍛えるのに早く起きてやってたのが・・・いつの間にか・・・ね・・・帰ってきたら1人の女性が

「あ、山本さんお帰り」

と言った。そう彼女は高原初優。俺は今でも高原さんと言いたいだけ・・・

彼女が・・・呼びすてじゃないといやだ・・・と言われた・・・。

「ただいま。初優」

特に・・・下の名前で・・・。あの後俺は浪人生活をするのにバイトや勉強など

忙しくなり高校で知り合った人たちも合わなくなった。俺は・・・魔界人との

戦いでラファエルさんがこの家のローンを支払ってくださった。ありがたい・・・。

まあ光熱費などはバイトで働けばなんとかかなと思ったんだけど卒業をしてから

1ヶ月後高原さんからいきなり

「私をこの家に住ませて下さい！」

いきなり言われた。俺は

「さすがに・・・男と女が一緒にいるとね・・・。」

俺は少し焦った。けど・・・

「親には伝えました。親は了承をもらいました。だから・・・お願いします。」

高原さんが頭を下げたから・・・俺は

「わ・・・分かりました・・・よろしくね。高原さん」

俺は言った。高原さんは

「はい。お願いします。だけどこれからは私のことは高原さんと言わないで

初優と言ってくださいね。」

と言われ俺と高原さんとの生活が始まったのであった・・・（第1章終わり）

久しぶり

いつも通りの日課をしていた俺でしたが・

「ピンポン。」

チャイムの音がしたので

「はいはいどなたですか？」

俺はドアの所に行き

「山本。俺だよ」

声が出たのが夏季坂と金崎だった。

「おう。久しぶりだな。元気だったか？」

俺は言くと2人は

「おう。もちろん。」

「うん。山本は？」

2人から聞いたので

「俺は元気だよ。まあ・ここで話すのもなんだし・
入ってくれよ。」

俺は2人を家に入れてリビングで高原さんが

「あら、夏季坂君と金崎君お久しぶり」

2人に挨拶をしたので2人は

「「お久しぶりです。高原さん」」

2人は答えた。俺は

「んで・今日はどうしたの？」

俺が2人に言うと

「ああ・。俺たちは予備校に入ってるけど山本は
真魅先輩に教えてもらってるだろ？だから・

今日は時間があつたから一緒に勉強会しないか？」

金崎が言ったので俺は

「そつだな・。まあ・うちもいろいろ勉強をしているが
予備校に入ってるお前らと一緒にやるのもいいな。」

ということであれは勉強会を開いた。もちろん高原さんも含めてね。まあ・・勉強会と言っても各自過去問を解いていくだけ分からないところはわかる人に聞きやっていくだけの簡単なことだ。もちろん俺は数学と英語がわからないのでこの中でも一番優秀な高原さんに聞いてみた。

「えーと・・高原さん。ここ教えてくれませんか？」

俺はわからない所を聞いてみると

「もう・・初優って呼んでよ・・山本さん・・。まあ・・ここはね・・」

教えてくれたのはいいんだけど・・やっぱりみんなの前でも初優と呼ばないと行けないのか・・。とか思った俺は・・。

そして・・4時間が過ぎ夕方18時

「そろそろ帰りましょうか。」

金崎が言っただので俺は高原さんに

「初優。2人を駅まで送って行くわ。」

俺が言うと

「はーい。じゃあ私は夕ご飯を作っとくね。」

高原さんが言っただけ俺たちは外に出たのであった。

(第2章終わり)

久しぶり〜（後書き）

毎日投稿するのが多分不可能に近いので・・・。
2、3日ぐらいを予定します・・・。
なるべく・・・早く更新できるといいな。
特に・・・短すぎない文章で。

疑問

俺は2人に駅まで送ろうとしてたら

「そういえば・・・山本。ずいぶん高原さんと仲良くなってるね。」

夏季坂が言うと

「そういえば・・・そうだな・・・どうしたの？」

金崎も疑問に思ったので聞いてみた。

「それはね・・・卒業式後俺は眞魅先輩にさ自分が通っている大学に来ようってということさ俺と夏季坂、金崎、高原さん、リオは眞魅先輩の大学に行くんじゃない。」

俺が言うと2人は

「「そうだね」」

と返事をした。俺は話を続けて

「んで・・・俺は・・・元々親戚が高校までの支援をしてくれたんだ・・・」

大学までの支援までは俺は考えていない。しかも夏季坂達は予備校行かないと危ないじゃん何かと・・・。だけど俺は・・・バイトしながら予備校は厳しいと思つて過去問を解いていつて眞魅先輩が来たときに分からない所を教えてもらうつということになつていたんだけどね・・・。数日後高原さんが来てさ・・・。

山本さんと一緒に住ませてください。と言われ・・・理由は俺も聞かされてはないけど・・・彼女が一方的に頼まれるから・・・。一応一緒に暮らしてるわけ・・・ただ・・・困ったことが・・・、普通男1人と女1人一緒に家の家に住むつということ普通親が許すと思うか？

俺はそこが心配だね・・・。んで最初のほうは・・・高原さんと呼んでいただけ

途中から・・・もう初優と呼んでください。と言われ・・・結局下の名前で呼ぶことに

なつたんだ……。これは未だに真魅先輩にも伝えてない……。だけれど……

本来なら高原さんも夏季坂達と一緒に予備校に行くはずんだけど……

俺はもう……。拒否件はないからね……。特に……。加奈子、糺見、コレットのほうも

まだ……。デート？というべきか……。1日付き合わないといけないしな……。

はあ……。俺はどうすればいい？夏季坂……。金崎……。

俺は2人に助けを求めただけ

「ん……。それは……。俺にも……。助けられないしな……。」

「ごめんね……。僕もそれは……。どうすることもできない……。」

2人は答えたので俺は

「だよな……。まあ……。相談にのってくれただけでも凄くありがたい……。

でも……。今日俺は2人に会えて本当に良かった……。ありがとう。

」

俺は2人にお礼を言って2人は

「久しぶりに山本に会いたかったからな……。」

「いえいえ……。僕も山本に会いたかったし……。分からない所が分かってよかったよ。」

2人が言った。まあ……。俺が教えられる所は社会関係だけだね……。特に歴史……。俺は将来何をしたいだろうか……。とか思ってたたり「ん……。まあ……。ちょっと僕ひらめいたことがあるから決まったら報告するね……。」

夏季坂が何か思いついたことを金崎の耳にコソコソ話をして

「お。それはいいアイデアだな……。まあそれなら聞いてみるよ」

金崎もかなりうれしそうだったが……。ちやうど駅に着いたので

「じゃあまたね……。」

俺が言うつと

「ああ、またな」

「またね」

2人は言って駅の中に入った。俺は家に帰ったのであった。

（第

3章終わり）

新たな生活？！

いつも通りに俺と高原さんの2人で日常生活をしていた。

まあ・俺は今浪人生活なので光熱費などラファエルさんが払ってくれると言ってくれたんですが・俺はそこまでしてもらうつもりがなかったので卒業パーティのとき

店長から・いつでも戻ってこいっということでもたバイトを始めたのはいいですが・さすがに2人分なので俺は多めにシフトを入ったが・それが高原さんが・・、

「私もバイトする！」

と言いだし・。俺はまあ、いいかな？っと思ってた数日後高原さんが入ったのは・うちのバイトだった・。・

俺は店長に質問を問いかけた。

「店長なぜ・？」

と・すると店長が・。・

「いや・山本の知り合いっということ・ね。しかもかわいいから」。まあ、さすがに山本と同じキッチンというと前みたい・ね。他の奴が山本だけを任せる可能性も高いからさホールっという条件で。っと言ったらあっさり了承もらった・。

ごめんね・山本。まあ・彼女にはなるべく遅くまでしないようにするから。」

店長が謝ってたので

「そうですか・。こちらこそ・お世話になります・。・」

俺は頭を下げた。まあ・その数日後この店は・高原さんの笑顔と頑張りで

かなり繁盛して・忙しくなった。まあ、いいじゃない？とか思ってた。

そして・その数日後・。・

「ピンポン」

チャイムの音が鳴り俺は

「はいはい、今開けますから」

と言いだアを開けたら夏季坂と金崎だった。しかも大荷物を持って

「どうしたのか？二人とも・まあ、入って・」

俺は2人をリビングに案内をして、2人に聞いてみた。

「んで・なんか大体は予想はしてきたけど・。どうしたのか？
2人とも。」

俺は2人に聞いてみた。金崎が

「まあ、俺らはさ予備校とか行ってるけどさあっちに行っても分からない所も

あるんだけどさ、成績優秀なやつばかりおってあまり先生にも聞けないんだ。

だからさ、予備校も行くけどその代わり・。いちいち家に戻って山本の家まで

行くのもなんだしさ・。前にお前と高原さんが一緒に住んでいるっていうことを

聞いたからさ・。夏季坂が『じゃあ・。大学受かるまで山本の家にお世話にならない？』

と言われてさ、俺も考えてみたのよ。山本は社会、国語関係が得意じゃん。高原さんは

英語、数学が得意だから・。分からない所勉強教えてもらいたい・だから・。

俺と夏季坂を山本の家泊らせてくれ！。お願い。」

2人は頭を下げた。俺は

「ん・。俺だけなら・。いいけどね・。」

俺は少し考えていたら高原さんが

「私なら別にいいですよ？私は山本さんの近くにいれば大丈夫だし・。」

「けど・。部屋どうするの？」

高原さんが言ったので

「んゝまあ・・・。元々空いてる部屋はあるから大丈夫だと思うよ？

まあ・・・物置ばかりになってるところが多いから・・・まあ、

何とかなるでしょう。」

俺は言った。今俺が住んでいる家（おばあちゃんの家）は一戸建てで1回はリビング、キッチン、お風呂で2回は俺の部屋、おばあちゃん

の部屋
空き室1つの3つだけ今は俺は自分の部屋で高原さんはおばあちゃん

の部屋に寝ている。
「まあ、最悪俺がリビングで寝ればいいから。今日は2人は俺の部屋で寝てくれ。

まあ、2人でベットで寝るのもいいし布団はあるから1人がベツトで1人が布団をひいて寝る
のもいいから。」

俺が言ったら少し2人が

「いや・・・俺たちは無理に頼んでるから・・・俺たちはリビングで寝るよ。」

「そうだよ。山本がリビングに寝ることではないよ・・・」

2人が言って少し考えてたら

「2人は山本さんの部屋で寝ていいでは？だけど山本さんはリビングで寝てはだめよ？」

いきなり高原さんが言ったので

「どういう意味？初優・・・」

俺は突然言われびっくりしたので聞いてみた。

「んゝそれはね山本さんは私と寝たらいいのよ？」

いきなり言われ俺たちは沈黙した。普通言わないよね？うん・・・。

結局俺は高原さんに

言われ・・・1回断ったら黒いオーラが出てて・・・最終的に俺は今日
高原さんと一緒に

寝ることになったのであった・・・。

（第4章終わり）

糰見とのデート

「では行つてきます・・・。」

俺は玄関で言うところの3人は

「・・・行つてらしゃい」

と言つた。俺は糰見と一緒に街に出かけた。

んで・・・なぜ、俺は糰見とデートをしないといけないのか？

というところ・・・数か月前俺は魔界人との戦いを金崎以外の人に

内緒で戦つてたが、糰見、加奈子、コレットの3人以外は

金崎が話したので知つてたけど・・・その代償で・・・卒業式後に

俺は裏切つた罰として・・・1人ずつ1日デートをすることになった。

もちろん・・・本当は眞魅先輩と高原さんもしないといけないけど

「私は山君を信じてたから」許すよ。だけど・・・絶対に大学に来てよね」

眞魅先輩は俺に行つてデートは無くしてくれた。

「私はデートつと言うより山本さんの近くにいればそれでいいので。」

「

高原さんが言つただけけど・・・もしかして・・・そのために俺の家に泊りたいつということかな？とか思いつつ・・・。

「私は」勉強が苦手だから・・・山さんと一緒に行けるか心配だから・・・。

勉強を教えてくれれば私はいいいので。」

リオは俺と一緒にの大学に行きたいそうだ。コレット見たいに天界に戻ると思いきや

「私は、パパから自由にしていって言われた」

ということではリオと一緒に行ければいいからつと言うことでデートは無くなった。

今日は糰見と1日デートで・・・普通ならデートコースとか考えるけど・・・俺は

そんなのが苦手で・・・今回は糰見が行きたいところに行くつもりだ。少し歩いて

「大学はどう？楽しい？」

俺は糰見に質問をすると・・・。

「うん。楽しいよ」本もいろいろあるし、友達もできたよ。勉強もかなり大変だけど

やりがいはあるね。」

糰見は答えた。俺は

「そっか」。それはよかった。今日はどこにいくのか？」

俺は糰見に聞いたら

「そうですね」。実は私も行きたいところ決めてないので適当に行きましょ。」

糰見がそう言って俺の手を引っ張った。まずは遊園地に行き、糰見が乗りたい

アトラクションをいき、その後動物園に行った。俺は糰見と一緒に外で遊んだことが

1度もなかった。だけど今回見てやっぱり女の子だな〜と思った。いつもは人との

接触がなく・・・1人で本を読むことが毎日だった・・・糰見が加奈子と友達になり

そして・・・加奈子が俺に紹介をしてくれたのがきっかけだった・・・いつの間にか

糰見も俺との会話で笑うことが多くなり俺は良かったと思った。空も暗くなり俺は

糰見の家まで送って言った。そして

「山さん・・・今日は私のために1日付き合ってくれてありがとうございます。」

糰見は頭を下げた。俺は

「気にするな。元々俺が悪かったから・・・その償いはできて良かったよ。」

楽しかったか？糰見」

俺は糰見に聞いてみた。

「はい！楽しかったです。山さんと1日2人きりでいることが1度もなく私は

ドキドキしていましたが・・・本当に楽しい1日でした・・・明日からまた

山さんと別れますが・・・またいつかデートしてくださいませんか？」

糰見が突然質問をしたので俺は

「俺でよければ・・・」

と答えた。それを聞いて

「よかった・・・。またその時はよろしくお願いします。私も時間がありましたら

山さんの受験対策にお手伝いしますので分からない所がありましたら遠慮なく

言ってください。私もがんばりますので・・・。山さんも来年は大学に受かってくださいね。」

糰見が言って家に入って言った。俺は

「ありがとう・・・糰見」

と言った。そう・・・糰見は眞魅先輩の大学に入ってた。加奈子は違う学校だけだね。

ついでに・・・眞魅先輩は大学の学科で栄養調理学科という普通専門学校にあるのに

普通の4年大学にある所を選び俺たちもそこに入らせようとしているそうだ。

糰見は国語、小説ということで文系の学科を選んでいる。俺は天魔人のときに

ミーフアさんからよく歴史を聞かされたので歴史が好きになったので社会学科に

入ろうとしているところだった・・・。夏季坂と金崎は入れるところ

ならどこでもいい

とか言ってたね。高原さんは・・・ちょっと分からないけど・・・なぜか・・・俺に

どこの学科に入るの？とよく言われたので・・・もしかしたら・・・同じ学科になるのでは？

とか・・・リオは・・・どこの学科に入るのかな？今現在リオは天界に帰って猛勉強をしている

所だった。分からない所はリディアさんとコレットに聞いていたり？とか？

まあ俺は考えつつも自分の家に帰ったのであった・・・。（第5章 終わり）

部屋割り！？

俺は糺見と今日1日デートをして家に帰った。

「ただいま」

俺は返事をして玄関に入った。そして・

「「「お帰りなさい」」」

金崎、夏季坂、高原さんが迎えてくれて俺はリビングに入った。

まあ、遅くなるということ伝えたから……。みんなは先に夕ご飯を食べていてもらいな。俺の分も用意してくれたのは感謝しないと行けなかったの。おいしく頂いた。そして・みんなお風呂を入った後

俺たち男3人で相談をした。というか・別に・どこでもいい話なんだけどね

「一応山本が出かけた後俺たちで空き部屋は掃除したからきれいになってるはず。」

金崎が俺に報告してくれたので

「あ、ありがとう。助かったよ。」

俺は言った。そして・少し沈黙した。

「んで・・・どうする？部屋割り・・・。俺はどこでもいいけどさ2人は一緒にいい？それとも別々がいい？」

俺は別にどこでも寝てもかまわなかったの。2人に聞いてみた。

「俺もどこでもいいけどね、夏季坂。」

金崎が夏季坂に質問をしたので

「うん。僕もどこでもいいし・・・一緒に部屋でも個人でも別にかまわないよ？」

2人はそう答えた。また・少し沈黙したから

「ん、じゃあ、もう俺がリビングで寝るから、2人は各部屋で寝てくれ。」

俺はめんどいのが凄くいやになる性格なので勝手に決めたのはいい

だけど・・・。

俺が言った後・・・後ろから黒いオーラが立って・・・俺たちは少し固まった。

それは・・・後ろにいたのは高原さんで・・・。

「もうなぜ私を相談に入れないの？」

高原さんが言ったので・・・

「いや・・・もう初優の部屋は決まってるから・・・後は・・・3人で・・・

決めたほうがいいしね・・・。ねえ？」

俺は2人に質問をしたら

「う・・・うん。」

と答えた。まあ今黒いオーラの高原さんに俺たちはちょっと・・・怖くなった。

「んで・・・決まったの？」

高原さんが聞いてきたので

「一応おばあちゃんの部屋は高原さんで俺の部屋を金崎、空き部屋を夏季坂

リビングは俺で寝るつもりだけど・・・。」

俺は答えたが・・・しかし、

「それじゃ山本さんがリビングに寝るのは・・・。じゃあ私と一緒に寝ない？」

突然高原さんが言ったので・・・少し沈黙して・・・

「う・・・え・・・？」「」

俺たち3人は答えた。そりゃそうだろ・・・普通一緒に寝るのか？恋人じゃないのに

男子と女子が一緒にの部屋に・・・それを聞いて・・・、

「私と一緒に寝るのがいやなの？」

高原さんが少し涙目で俺を見つめていたので・・・

「はあ・・・分かった・・・初優に任せるよ・・・。だけど・・・他の人が泊るときは

部屋割り決め直すからね。」

雑談・・・

俺たちは少し雑談をしたので俺は部屋に戻って・
後で高原さんの部屋に行くつもりだったが・

「ところで・山本は高原さんと付き合ってるのか？」
金崎が少し気になっていて

「うん・僕も淒く気になってた。どうなの??」

2人は淒く気になってたから

「あゝ俺はもう誰も付き合うことはないぞ？」

俺はあっさりと答えた

「どうして??」

2人は疑問に思ったから

「んゝなんていえばいいかなゝ・話は長くなるかもしれないが
昔から俺はあまり・人との接してなかったんだ・小さいころ
まで

親と居るのがすごく楽しかったが・・・。だけど・俺が小さい
ころに

親を亡くして・おばあちゃんに引き取られるまで俺は・

小学校で加奈子に連れ回され糶見と知り合った。だけど・俺は
現実から

逃げたくておばあちゃんの家に行くから学校を転校をしたんだけど
やっぱり馴染めなかった。だけど・それを助けてくれたのは眞
魅先輩だ。

俺は誰とも接してなかったけど・眞魅先輩は俺が話すまで毎回
毎回来てくれて

眞魅先輩は楽しそうに話しかけてくれた。俺は眞魅先輩には本当
に感謝している

だけど・おばあちゃんも中学校になってから無くなり俺は・
おばあちゃんの

親戚から支援を受けることになったけど俺は無くなる前に天魔人
ということを知って

俺は自分で生きていこうと決心をし俺はおばあちゃんの家から
逃げてあのアパート

生活を始めた。おばあちゃんが亡くなってから眞魅先輩が親代わ
りとして時々料理を

作ってくれたり勉強を教えてもらったりしてくれて本当に助かつ
てるけども俺は

自分で何でもできるようになりたいから眞魅先輩に頼んでバイト
を始めた。

最初のほうはいろいろな人に迷惑をかけたけども大分よくなって
バイトをしながら

学校によく言ったな〜だけど・・眞魅先輩以外はあまり接してな
かったね。

だけど・・高校に入り・・また加奈子や糰見と出会い、困ってい
るコレットやリオに

出会ってしまったてから・・俺は・・またいろいろ大変なことが起
きるだろうか・・

とか思いつつ・・半強制で加奈子達に付き合ってたよ・・。俺は
知らないけども・・。

一応リオとコレットは眞魅先輩に過去のことを聞いても俺と友達
になりたい。つと言われた

から一応友達ならつと俺は答えたけど・・なぜか・・みんなかな
り俺に話しかけてくれるから

俺は本当に・・毎回逃げていたよ・・。まあ・・金崎達に出会う
までは・・。

多分俺は鈍感だと思うけど・・。やっぱり加奈子たちは俺のことが・
・。？」

俺は不安そうに2人に質問をして
「ん〜そうだと思うよ？」

2人はそう答えるしかなかった。見た感じみんな山本が好きで近寄
つてゐるしかないからね。

と2人はこの中で言った。

「まあ、山本が誰も付き合わないならそれはそれでいいんだけどいつ
か山本も

変われると思うよ？まあ、これからも大変だけど、俺たちはでき
る限り

サポートするよ。だけど、恋愛だけは、相談にはね。。す
まん。」

「うん、そうだね、僕も恋愛はちょっとだめだね、付き合った
こともないし。。」

まあ、僕もできる限りはサポートするよ、だって俺たちはあの
時に仲間になったから

僕も山本の役に立ちたいから」

2人はそう言ってくれたので。。

「ありがとう、二人とも、俺が本当に助けてほしいときに、
。。」

お願いします。。」

俺は2人に頭を下げた。それを見て

「それはもちろん」

2人は答えた。雑談も終わり俺は

「じゃあ、これ以上待たせると初優が、また黒いオーラ、出し
てるかもしれない。。」

から、もう行くね、何か物足りないものがあれば、遠慮なく
言ってね」

俺は2人に伝え、俺は急いで部屋に戻り準備をして、高原さん
がいる部屋に

向かって言った。。

（第7章終わり）

お久しぶりです。

朝・・・6時・・・

「ね・・・眠れん・・・」

俺は今高原さんの隣にいるんだけど・・・緊張して・・・寝れなかった。一緒に寝るっと言っても俺は布団をひいて寝ると思って布団を持ってきたら・・・

却下され・・・俺を無理やり・・・ベットに引き込もうとする・・・高原さんを見て

凄く寝れなかった・・・そして・・・反対向きをすると・・・少し黒いオーラが出て

「反対向いちやだゝめ」

と言われ・・・俺は高原さんが寝るまで・・・起きていたが・・・隣にいただけで

凄く緊張していて・・・寝れなく・・・結局朝6時・・・んでこそっとベットから出て

俺はリビングに行って少し準備をしてから朝のジョギングに出かけた。

いつも通りのコースを走っていたら

「おはようございます」

と1人の男性から声をかけたので

「あ、おはようございます」

俺も返事をした。少し走って言ったらずかしい人が俺の前に現れた。

「お久しぶりです。山本様」

ラファエルさんとフラユンスさんが居て俺は

「あらーラファエルさんとフラユンスさんお久しぶりです。

どうしたんですか？自分に何か用があるのですか？」

俺が2人に質問をしたらラファエルさんが

「んー毎日山本様がこのコースを走っているっと言うことを聞きま

して・・・。

久しぶりに会いたいなっと思いました・・・。魔力のほうはどうですか？」

と聞かれたので

「まだ・・・完全に魔力は戻ってません・・・まあ・・・少なから魔法が使えるように

になりましたが・・・。」

俺がそう言つと・・・。

「そうですね・・・まあ・・・僕もそういう経験があるので・・・時間はかかりますが

いつか魔力は戻りますので。」

フラユンスさんが言ってくれたので

「どうもありがとうございます。これから2人はどうしますか？」

俺は2人に質問をしたので

「そうですね・・・まあ・・・一緒にジョギングしようか・・・フラユンス様」

「そうですね・・・まずはジョギングしましょうか」

そう言つて俺たち3人はジョギングコースを走つて家の前まで行つて俺は

「少し家に休みませんか？なにか話したいことがあるですよね？」

俺は2人に質問をしたので

「そうですね・・・では少しおじゃましますね。」

ラファエルさんが言つて2人は家に入った。まだみんなは寝ていたので

リビングに行つて俺は2人にお茶を出した。そして・・・

「自分に話したいことは？」

俺は2人に話した。フラユンスさんが俺に

「まあ・・・何と云えばいいかな？山本様は魔界人との戦いの栄誉があります。」

そこで・・・1度魔法世界に来ませんか？遊びに・・・まあ・・・僕も

魔力が

あまりないので・ラファエルさんに頼んで飛ばしてもらっために・・

一緒に来てもらいました。」

そう・フラユンスさんも魔界人の戦いでかなりの魔力を消費してしまっただけ

大分回復したのですが・川崎さんから魔法禁止令を出されてしまひ・・。

ラファエルさんに頼んでここまで来たつと言うことだ。

「私も山本様には1度魔法世界に行ってみたらどうですか？コレットから

聞くと山本様は歴史関係の学科に入ると聞いたもので魔法世界はいろいろな

歴史があります。貴重な経験もありますので1度来てみませんか？」

ラファエルさんが言ったので

「そうですね。行きたいのですが・・」

俺は・・今浪人生活＋バイトなどいろいろあるからすぐに行きます！つと言う

わけにもいかないのだ・・。

「まあ、他に連れて行きたい人がいれば遠慮なく言うてください。一応魔法世界に行くときは言うてください。」

ラファエルさんが言ったので

「ありがとうございます。考えさせていただきます。」

俺は2人に言った。

「山本様が来てくださるとうちの励も喜ぶから、ぜひ来てくれると助かるよ。」

いろいろと案内しますのさ。」

フラユンスさんが言っつて2人は家から出て行つた。俺は少し考えて今日の

朝ごはんを作りキッチンに向かった。

（第8章終わり）

会議・・・？

「というわけなんだけど・・・行きたい人いる？」

ラファエルさん達が帰った後俺は朝ごはんを作ったら

なぜか・・・高原さんから怒られた・・・まあ・・・なんか

食事は私に任せて！つということだ・・・朝ごはん後俺は

みんなにラファエルさん達が来たことや魔法世界に招待されたことを話したら3人は少し考えて

「ん～それは・・・つまりフランスさんは山本を魔法世界に来てほしいっていう

ことでいいのかな？」

金崎が言ったので

「うん・・・そうらしいね。んで・・・みんなが行くなら遠慮なく連れてきていいからと言われたけどどうする？俺は行こうと思っている。」

俺はラファエルさんから言われた歴史について学びたいと思っている。

「ん～まあ・・・俺も山本が1度魔法を使ったところしか見たことがないし・・・

少し興味があるね～山本は何か行きたい理由はあるの？」

金崎が俺に質問をしたので

「ん～まあ。俺大学に入るための学科でどうしても知りたいことが山ほどあってな

ちようどラファエルさんから、ぜひ行ったほうがいいと言われたからちよつと

興味を持つてな。まあ～軽い勉強として行くつもりだよ。まあ・・・

ただの観光

だけでは・・・勉強が愚かになるから・・・一応勉強できる時間があれば

やろうかと思っっているけど？」

俺は言った。夏季坂は

「それなら僕も行きたいんだけど・・・かなり休むと予備校少し遅れてしまうから

あんまり休めないけども・・・大体何日魔法世界にいるの？」

と聞かれたので俺は

「んー俺も1週間はさすがに・・・と思ったから・・・一応3、4日は頼もつかなくと

思うけど・・・どうかな？」

みんなに聞いてみたら

「・・・いいじゃない？」

という返事があった。結局俺たちは今いるメンバーは全員行くことになったが・・・

多分・・・このままで行くと後で眞魅先輩たちに何か言われると思い。一応他の人に

今までのことを話して結局行くことになったのは俺、高原さん、夏季坂、金崎、

糰見、リオ、コレット、眞魅先輩の8人で行くことになった。加奈子は試合が週末に

試合があるということで今忙しいから今回は行けないっと言うことで不参加になった。

俺はラファエルさんに連絡をしたら

「分かったーじゃあフラユンス様には伝えとくよ。私は行き帰りだけしか

参加しないけども楽しんでくださいねー。」

と言われた。そして魔法世界に行くときにみんな家の前に集合している

「みんなーお久しぶりー元気してたー？」

眞魅先輩がみんなに挨拶をしていた。コレットとリオは先に言っているということなので

俺たちもラファエルさんのテレポートで魔法世界に飛ばしてもらった。
(第9章終わり)

魔法世界 その1

俺たちはラファエルさんに飛ばしてもらい。ついに・・・魔法世界に俺たちの前にいたのはフランクさんと川崎さんそして知らない方が3人

「お久しぶりです。励さん、フランクさん今日から3日間

お世話になります。よろしくお願いします。こちらの3人は・・・？」

俺は2人に質問をしたら川崎さんが

「山本さんは初めてお会いしますね。こちら左からキトさんティオさん

ことりさんです。キトさんは魔法戦士でティオさんは赤魔導師、ことりさんは援護魔法です。この3人はこの魔法世界でのトップクラスに

入る人ですね。」

軽く説明をしたので1人ずつ挨拶をした。

「初めまして、私の名前はキトと呼びます。川崎様から言われた通り私は魔法戦士です。どうぞよろしくお願いします。」

キトさんは軽い自己紹介をして次に

「初めまして、ティオと呼んでください。何か分からないことや相談などがありましたら。ぜひ私に遠慮なく言ってくださいね。」

ティオさんが挨拶をして最後に

「初めまして私の名前はことりです。援護魔法が主ですが私は援護魔法でのトップではありません・・・ですが私は歌が凄く好きなので今度聞いてくださいね。」

3人は軽い挨拶をしたところで俺たちは「・・・こちらこそ、よろしくお願いします。」「・・・」と言った。その後ラファエルさんは

「じゃあ私はこれで。みなさん楽しんでくださいね。」

ラファエルさんが言って消えていった。そしてフラユンスさんが「では・・まずはお荷物は部屋にもっていきましょう。キト、ティオ案内して」

フラユンスさんが2人に言ったので

「はい、分かりました。」

と言って俺たちの持ち物を兵士が持つて各自部屋を案内をした。まあ・・

俺がフラユンスさんに頼んで俺、金崎、夏季坂の3人と真魅先輩、リオ、コレット、

糺見、高原さんの5人と別の部屋特に離れたところにしてほしいと頼んだ所

少し苦笑いをしたんですが了承してくださった。ですので俺たちはキトさんに

案内してくれて途中で

「私は山本さんに出会えてよかったです。」

突然言われたので俺は

「え・・・？」

と答えた。それを聞いて

「あ・・突然でしたね。すいません。ですが・・あなたがユン様をお助けなければ

今頃ユン様はこの世にはいなかったはず・・。ですが・・山本様のおかげで

ユン様は今も元気でいられるのは私たちの誇りです。本当にありがとうございます。」

キトさんは俺に頭を下げたので

「俺は何にもしてませんよ・・。」

俺は答えた。しかし

「いえ・・ですが・・その代わり山本様が大分魔法を消費したつと言うことなので・・

残念ですが・・いつか・・魔力が戻ったら私とたたかってください

いますか？」

キトさんが俺に聞いてきたので

「自分でよければ。」

と言った。それを聞いて2人は

「『いいな』俺たちも魔法が使えればいいのに・・・」

2人が言ったのを聞いてキトさんが

「私が見る限りお二人も魔法が使えますと思いますが・・・後でよろしければ

指導しましょうか？」

キトさんが言ったので2人は

「『え！いいのですか？！』」

と笑顔で言った。それを聞いて

「ええ、私の見間違えなければ2人は違う属性の持ち主だと思うのですぐに小さい魔法ですが使えると思いますよ。」

キトさんは答えて

「よかったな、金崎、夏季坂」

俺は2人に返事をした。2人は

「『うん（おう！）』」

と答えて一応部屋までついたので

「ではあとでまた来ますね。ごゆっくりどうぞ。」

キトさんはそう言って部屋を出た。その後俺たちはキトさんの指導のおかげで

夏季坂と金崎は魔法のありがたみを知ることとなった。（第10章終わり）

魔法世界 その2

キトさんから連れてきたのは裏庭だった。

「まずは・・・魔法はなぜあると思います？」

キトさんは質問をしてきて2人は

「「分かりません・・・。」」

と言った。それを聞いて

「そうですね。実は私も分かりませんよ？」

キトさんが答えた。話は続けて

「まあ、それはウン様も分からないと思います。

ですが・・・この魔法の力で人を助けることも

傷つけることもできます。まあ、それは

人それぞれですが・・・今から教えることは

この杖を使って魔法を使っていたできます。」

キトさんは金崎と夏季坂に杖を渡した。

「僕たちも魔法を使えるのですか？」

夏季坂が言って

「人は魔法の才能という言葉聞きますが

誰でも使えますよ。ですが魔法世界の住人出ない方は

多分こういう杖や武器に頼らないと魔法を使えないでしょう。

では・・・金崎さんあそこにある石に「ファイアー」と唱えて

ください。」

キトさんが言って石にむかけて

「ファイアー！」

呪文を唱えて杖を石に向けて小さい火の玉が向かった。そして

石に当たった。

「お・・・当たった・・・」

金崎が少しうれしそうにしてキトさんは

「まあ・・・。何回も使ったら体が疲れて倒れてはいけませんので

ここで……。少し説明しますね。なぜ私は金崎さんをファイアーを唱えてくださいと言ったか。それは金崎さんはなんでも燃えるという

性格だと思いましたので火属性の技が得意だと思いました。後で夏季坂さんもやってもらいますが、夏季坂さんの場合はウォータ―を

唱えてもらいます。夏季坂さんは冷静そうに見えますので水属性の技が使えるでしょう。まあ……。先に使うより少し歴史のほうをまずはこの世界、いえ……。全世界の属性は火、水、土、風、土、光、闇の7属性に当てはまります。みんなは性格によって大体は属性

決まりますが人によっては全属性使える人もいます。

ですが……。使い方によっては人を殺めることもあるし自分も亡くなる場合も

あるので気をつけてくださいね。」

と言ってくれた。俺もそうだな……。とか思った。

「じゃあ、魔力はどうやってあげるのですか？」

金崎が疑問に思ったのでキトさんに聞いてみた。

「それはですね……。2つの方法があります。まず1つ目それは体力をつけることです。それは私やユン様、山本様もそれで魔力を高めています。しかしただ鍛えるだけでは魔力はそんなに上がりません。

もう1つは精神を鍛えることです。まあ……。もし私ならユン様を守りたい、

そして国民を守りたいという気持ちで鍛えればこんな感じになります。

金崎さんや夏季坂さんもいつか分かってくると思いますよ。」

キトさんは説明してくれた。それを聞いて

「「ありがとうございます。」」

2人は挨拶をした。そしてユン君から俺たちにテレパシーを送って

きた。

「みんな楽しんでる所でごめんけどキト、少し山本さんを僕の部屋まで

連れてきてくれない？」

フラユンスさんが言って

「はい、分かりました。今すぐに行きますね。」

と言ってキトさんは

「では、山本様行きましょう。夏季坂さんと金崎さんは後でまた軽い修行しましょう。少し休んでください。」

と言って俺とキトさんは一緒にフラユンスさんの所に向かった。

（第11章終わり）

魔法世界 その3

はキトさんにフラユンスさんの部屋に連れてもらった。

「失礼します。」

キトさんはそう言っただけで部屋にきた。

「ありがとう、キト。山本さん修行中の所でごめんね。」

フラユンスさんが言っただけ

「いえ、自分はもう基礎のことは習いましたので……。

自分に何の用ですか？」

俺はフラユンスさんに質問をしたら

「あゝごめんごめん。山本さんは歴史に興味があるんだったよね？

特に精霊の歴史について。」

フラユンスさんが言ったので

「はい。最初はどこでもいいと思ってたんですが……。

ミーファさんとラファエルさんから聞いて全世界の歴史関係

その中でも精霊のことについて勉強したいなあゝと思ってたところなので」

俺はフラユンスさんに言った。それを聞いて

「そうですか。じゃあゝちょうどよかったね。今セイが帰ってきて

顔を出してくれたから山本さんに紹介するよ。」

俺の前に1人の男性が現れた。

「初めまして。私の名前はセイ・ライザと申します。あなたのことは今

フラユンスさんから聞きました。私も歴史が好きでしてね。特に

遺跡について。今ではこの世界をのんびりと回らせていただいて

ます。

どうぞよろしくお願いします。」

セイさんが手を差し伸べたので

「こちらにもよろしくお願いします。」

俺とセイさんと握手をした。

「ということで、山本さんは今から精霊にあってもらおうかな。」とセイと

話してたところだけで行きたい？」

フラユンスさんが言ったので

「そうですね。行きたいですが・・・。」

俺は少し不安だった。それは・・・俺がいなかったら・・・女性陣がね・・・。

「ああ、彼女達なら励が何とかしてくれるさ。金崎さんと夏季坂さんは

キトに任せればいいし、俺も軽いことなら教えられるから。本当は僕も行きたかったんだけど・・・。励に止められちゃた・・・。」

少し落ち込んだフラユンスさんを見たのは初めてだった。

「だから、私がちょうど帰ってきたのでフラユンスさんから頼まれました。」

ですが・・・。山本さんは残り3日と聞いたので急いで行きますね。

多分今会ってくださる精霊はキャラロットとサンダーバードに会ってもらいます。」

セイさんが言って

「はい、よろしく願います。」

俺は言った。一応旅に行く準備はフラユンスさんがしてくれたんですぐに俺とセイさんは

精霊に会いに行った。歩きながらセイさんは

「山本さんは精霊は全世界に何種類居ると思います？」

セイさんが言ったので

「んーそうですね・・・100種類ですか？」

俺は答えた。そしたら

「正解は6種類ですね。300年前は100種類以上居たんですがもう・・・。」

今では6種類になりましたね。この世界には雷の精霊サンダーバ

ード

氷の精霊キャラロット、風の精霊ウィンターバード、光の精霊オリジン

闇の精霊シャドウ、水の精霊ミーフアの6種です。」

セイさんが答えながら俺たちはキャラロットさんに会いに行った。

(第12章終わり)

魔法世界 その4

俺とセイさんが旅をしていることを知らない女性陣5人は

「テイオさん、川崎さん料理上手ですね」

眞魅先輩が2人に言って

「いえ・・そんなことはありませんよ。元々私は川崎様から教えてもらったので・・。」

テイオさんが言って

「私はテイオさん料理しないからね。少し教えたらすぐに私より早く料理がうまくなると思ってもいなくて・・。」

しかし・・皆さんも料理上手ですね。今の子ってこんなに早くから料理できる子多いの？」

川崎さんが5人に聞いて見て

「そうですね。私は小さい頃親に教えてもらって料理が初めてできたときは

本当にうれしかった。それからどんどん料理を作ることが好きになり

いろいろな人に食べさせたいと思って今も料理を作ることが大好きです。」

眞魅先輩が言って

「私は・・元々料理は好きじゃないけども大好きな人がいて・・。その方に喜んでもらうために頑張っておいしい料理を作っています。」

高原さんが言うと

「私もそうです・・。私も大好きな人がいます。そのために少しでも料理ができるといいな・・っと思っています。」

「うん・・私も・・。」

リオとコレットが言うと

「私は・・小さいころから親の手伝いをよくしてたのでいつの間にか

料理が趣味になってしまいましたね。」

糰見が言った。それを聞いて

「そうですか。皆さんそれぞれの理由があって料理をしてるのですね。

実は私も糰見さんと同じで親の手伝いをしていて・・・いつの間にか趣味になってしまいました。ですが・・・ユン君と出会って好きな人に

料理を振る舞うのがもう楽しくてね。じゃあ皆さんがんばって晩御飯に

間に合うように作りましょう！」

川崎さんが言ってみんな

「「「「「おう！」「」「」「」

と言って各自得意料理を作って晩御飯を作った。（第13章終わ

り）

魔法世界 その4（後書き）

魔法世界編が長くなりそうなので次からは
タイトルを変えますね。

一方男性陣は？

「大分上手になりましたね」

キトさんが金崎と夏季坂の2人をほめた。その理由は・・金崎の目の前の大きな石が4つ粉々。夏季坂の目の前には石の中心に穴が開いていた。

「キトさんの指導がよかったですよ」

金崎が言うと

「うんうん。キトさんの指導があつたこそこんなにうまく使えるようになったのですから。自分今凄くうれしいです。」

夏季坂も言つて

「それは・・本当にうれしい限りです。ですが・・。」

私は指導と言うよりアドバイスしかしていませんよ。

私の指導なら本当は金崎さん夏季坂さんは本当は後2回ずつしか使えないと思ってただけど2人の頑張りの成果でこんだけの魔法を使えるのは自分もびっくりしてます。しかし・・

今日はここまでにしましょう。これ以上無理するといけませんので次はまた明日つと言つこと。まあ、まだ後2日まで時間があるので

頑張しましょう。まあ、今ティオから連絡があつてな今女性陣が晩御飯を作つてるらしいから少し部屋で休憩をしてきたらいいよ。

「

キトさんが言つと

「分かりました。しかし・・山本はどこに行つたのですか？」

金崎が言つと

「あゝそれは僕から説明するよ。山本さん達を呼びたしたのは1つは励が会いたいつと言つことが1つ。そしてもう1つは山本さんは将来歴史関係に強くなりたいと言つことを聞いたのでうちの知り合いに

頼んで今日から3日間遺跡巡りに言つたよ。」

フラユンスさんが言つて

「そうなんですか。じゃあ最終日まで山本は帰ってこないですね。」

夏季坂が言つて

「そうですね。まあ、何かあればテレパシーで伝えることはできるから」

何かあつたら遠慮なく言つてください。」

キトさんが言つて

「はい、ありがとうございます。」

2人はお礼を言つて

「じゃあ晩御飯までゆっくりして来てくださいね。」
と言つた。
(第14章終わり)

セイさんの過去話

金崎、夏季坂、女性陣が山本がセイと遺跡巡り

（精霊に会うための旅）を知らない頃。

「セイさんはどうして遺跡巡りが好きになったのですか？」

俺はセイさんに質問をした。

「そうですね……。元々私は小さいころは遺跡なんて

全く興味を持たなかったのですよ。というか遺跡が大っ嫌いな

人でしたから……。ですが・小さいころ私は普通の生活をして

いたのですが私の父は遺跡マニアで仕事がない日はいつも遺跡巡りを

していて・私は遺跡と父が嫌いでした。しかし、ある日父が私と

一緒に遺跡巡りをしないか？と聞かれたのですが私は断りました。

だってそんな父が嫌いでしたから。そうしたら父は分かった。と言って

また1人で遺跡巡りをして家を空けたんだけど帰ってきたとき父

は私に

遺跡から出た宝を見せてもらい私はそれに魅かれてしまい今こうして

遺跡巡りをしているところなんですよ。」

セイさんが言った。

「そうなんですか。じゃあ・今までは興味を持たなかった物がいつの間にか

セイさんのお父さんがセイさんの興味を引き出したのですね。」

俺はセイさんに言った。

「まあ・自分も嫌いだった物はいつか・好きになるつということですね……。」

最初は父と一緒に行ってたんですが段々自分が大きくなって1人で行くことが

多くなつたんですが自分の世界の遺跡は大体制覇したので違う世界に行きたくって

今も旅をしているんですが・・やっぱり魔法世界はいいですね。

遺跡の中に精霊が

まだいるといろいろな歴史が聞けるのですから・・うちのところはもう・・

いないので。」

セイさんが最後にちよつと暗い言葉を言ったので

「そうなんですか・・・ですが自分も元々興味を持たない物を違う人から学べるのが

すごく楽しみなんですよ。今回もミーファさんから精霊歴史を少し聞いていいな」

勉強してみたいな。つと言つてたらフラユンスさんがセイさんを紹介してくれて

しかも一緒に遺跡巡りをしてくださるなんて夢にも思っていましたよ。」

俺はセイさんに言った。

「そうですね。じゃあ私も山本さんが満足してもらうために頑張らないとね。

あ、もうすぐ氷遺跡が見えますよ。そこに氷精霊キャラロットがいます。」

セイさんが言つて俺たちは氷精霊キャラロットに会いに行くのですがその時俺たちは新たな戦いが起きようとはしなかった・・。

(第

15章終わり)

氷精霊キャラロット その1

俺はセイさんに過去話を聞きながら氷精霊キャラロットに会うために氷遺跡を向かった。そして

「ここから寒くなるのでこれをつけてください」

セイさんが渡されたのはマントのようなものだった。

「これは？」

俺はセイさんに聞くと

「これがないと長くここにいられないから・昔は魔法で寒さを防いだんだけど・私は・氷使いではないのでちよつと自信がないですよ・。んでユンさんが今回のためにこのマントを作ってくれました。これはファイアーマントと言ってこの寒さでもこのマントの効果で半径20?は暖かく感じられるアイテムです。」

セイさんが説明してくれて

「ありがとうございます。」

俺は礼をした。ファイアーマントをつけて奥に進んで行くと大きな門があり

「ここの門を通ったら精霊の部屋があるんだ。」

セイさんが言って門を開けると・そこに居たのは傷だらけの1体がいて

「おい・・キャラロットどうしたんだ!？」

セイさんが言ってキャラロットという精霊は

「ああ・セイお久しぶりだな・これは・もう1人の方と一緒にとか珍しいな・。」

と言って俺は慌てて

「自己紹介は後です・まずは・手当をしないと・。」

俺は慌ててまわりをみるが薬草など見当たらない。そう・氷遺跡だから

まず・草は生えないから・

「大丈夫私は光属性の技使えますから。」

セイさんは言って魔力が溜めて

「サークルキュア！」

唱え、キャラロットの傷がどんどん治されて言っ

「す・す・すごい・」

俺はセイさんの魔力に驚いた。そして・

「どうしたんだ？キャラロット」

セイさんがキャラロットに聞いたら

「ああ・、この頃な精霊を消そうというものが増えてきてな。いるんな

世界から来てさ何とか追い払ったのはいいが今回ののは魔力が高いやつが

やってきて正直危なかった。というかセイが近くに来たおかげで

相手は

魔力に気づいて自分から去ったよ・。助かった。」

キャラロットが言うと

「そうか・。では・。もうあの組織が動き出したっていうわけか？」

セイさんが言うと

「ああ・。そうだクンドン復活に向けて魔力が高い俺やサンダーバードなど

精霊の力を吸い取り魔王クンドンを復活させようとしてるだろうな。」

とつぶやいて

「そういえば・。セイの隣にいる方・。もしかして精霊と契約してる者か？」

キャラロットさんが俺に向けて言うと

「ああ、今回キャラロットに会いに来たのはこの山本さんを紹介したいために

来たんだが・。」

セイさんが説明をして、俺は自己紹介をした。

（第16章終わり）

氷精霊キャラロット その2

「初めまして山本連暮といいます。よろしく願いします。」

俺は自己紹介をした。

「そうか・・あのシャドウを契約した人か・・ユンから話は聞いているよ。」

おっと・・俺の自己紹介がまだだったな。俺の名前は氷精霊キャラロット

まあ・・元々は励の契約者だったんだけどな今では契約者なしでの氷遺跡の

住民だ。まあキャラロットと呼んでくれ。山本連暮かいい名前だ。

今シャドウは

元気になっているか？」

キャラロットさんが言う俺はリングからシャドウを出した。

「よお。お久しぶりだなキャラロット。まさか・・お前が・・やられかけてるとは

見たことがなかった・・。」

シャドウは言った。

「まあな・・多分それは・・サンダーバードも言えるはず・・あいつも契約者がいないから

魔力が高いやつだと戦いにくだらうな。」

キャラロットが言うのと、俺は疑問があり、

「元々契約してない精霊は力は増幅し契約すると魔力が制限されると思ったのですが・・・違うのですか？」

俺は質問をした。

「いや・・それは違うよ山本。契約しない精霊は制限なしで大幅な魔力があるが

その弱点で使いすぎたら当分魔法が使えなくなり弱くなる。まあ今回の俺見たいな

感じだけだな。ただな自分に合った契約者と契約すれば魔力も制限され

精霊の魔法の威力が上がるのだ。そう・・・シャドウと山本は同じ閥属性だから

お互いの威力が上がってるはず。だが・・・俺やサンダーバードは元々励と仮契約と

して励の守りとしてやってたんだが・・・もうそれも必要なくなつたから俺と

サンダーバードは元々自分のいた場所に戻っていた。でもしかし・・・時間が経っていくと

魔力はどんどん下がりがり精霊もいつか死んでしまふ。だから本当は100年に1回程度は

契約しないといけないのだ。ですが・・・魔力を使いすぎると早く死ぬこともあります。

まあ・・・今回はセイが近くに来てくれたおかげで本当に助かった。ありがとうな。」

キャラロットが言う

「いえいえ・・・でも無事でよかったです。しかし・・・例の組織が動き出したということは

キャラロットとサンダーバードは早く契約者を探さないといけないですね。

まずは仮契約として山本さんと契約したらどうですか？」

セイさんが言う

「そうだな・・・俺はそのほうがいいが山本の判断に決める。」

キャラロットが言う

「自分は仮契約かまいませんよ。でも・・・急がないとサンダーバードも危ないでは？」

俺が言う・・・2人は

「そうだな。」

「そうですね・・・まずは・・・仮契約をしてサンダーバードがいる雷

遺跡に向かいましょう。

そのあとに一旦城に戻り会議をしますので・・・もしよろしければ山本さんも参加してください」

セイさんが言う

「わかりました。うちでよければ・・・。」

と言いつつ俺たちはサンダーバードがいる雷遺跡に向かうために氷遺跡を後にしたのであった。

（第17章終わり）

現状

「えゝ山さんいないのですか？」

リオが言うつと

「えーと・・今山本さんはうちの知り合いのセイと一緒に
精霊と会うために遺跡を巡ってますね。すいません・・。」

フラユンスさんが言うつと

「そうよゝン君行く前にちゃんと伝えないと。みんな一緒に
食べたかったのにゝ私もちよつと山本さんと話したかったなゝ」

川崎さんが言うつと

「すまん・・励。本当は俺と一緒にいくつもりだったんだけど
ちよつとセイが返ってきたからついね・・。まあ、最終日には
戻ってくると思うけど・・どうする？呼び戻す？」

フラユンスさんが言うつと

「んゝそうだねゝまあ・・山本さんが帰ってきたときに話せばいい
かな？」

んで精霊に会うのつてもしかしてキャラちゃんとサンダーさん？」

川崎さんが言うつと

「うん・・まあこの世界にはもうキャラロットとサンダーバードし
かないからね

早ければ明日には返ってくるじゃないかな？まあ・・セイのこと
だしもしかしたら

自分おすすめの場所を案内してるかもしれないけどね。」

フラユンスさんが言うつとちよつと・・

「ユンさん聞こえますか？セイです。」

セイさんからテレパシーで送られてきて

「お、ちよつとセイからテレパシーが来た。まあゝ皆さんは先に食
べててください。」

フラユンスさんが言うつと

「はい、聞こえてますよ。どうしたのですか？」

と質問をして返ってきたのは

「えーと・・先ほどキャラロットに会いに来たのはいいですが到着した時には

キャラロットは大怪我をしていました。多分例の組織が動き出したようです。」

という言葉聞いて

「そうか・・じゃあ一応ティオやキトにも伝えとくよ。山本さん、セイ、キャラロットは

無事だったのか？」

フラユンスさんが言うと

「ええ・・キャラロットは大怪我をして私が魔法で治しました。私と山本さんは来た時には

もついなかったので無事です。んで・・一応キャラロットを氷遺跡にいとまた狙われ

危険なので一応仮契約で山本さんと契約しました。それとサンダーバードも危ないと思ってる

ので今サンダーバードの雷遺跡に向かっています。サンダーバードが無事ならば仮契約をして

城に戻りますね。」

セイさんが報告を終わると

「ああ、分かった。城に帰ったら緊急会議を開こう。一応私からラファエルさんにも

伝えとくから・・大変だけどセイも協力してくれるか？」

フラユンスさんが言うと

「私はもちろんです。では・・何かあったらまた連絡しますね。」
と言ってテレパシーを切った。

「ふう・・」

フラユンスさんが言って

「どうしたのですか？ ユン様」

キトさんが言うと

「ああ・・ちよつとね。キト、ティオあとから重大な話があるから俺の部屋まで来てくれないか？」

と言って

「はい・・。分かりました」

2人は言ってみんな食事をとったのであった。

（第18章終わり）

会議

「そうですか・・例の組織が動き出したですね。」

ティオさんが言う

「ああ・・んで一応サンダーバードが無事でいてほしいんだけど
セイから聞くとキャラロットと戦ったやつはキトの魔力と同じ
ぐらいだと聞いた。ちょうどセイが来なかったらやられたかも
しれないけどね・・。まあ・・セイたちが帰ったら緊急会議を
するから、2人もよろしく頼むよ。」

フラユンスさんが言う

「はい、分かりました。川崎さん、山本さんはどうしますか？」

ティオさんが言う

「励には・・自分から話そう。山本さんはもう知ってしまったから
一応頼んでみるよ。だけど山本さんは魔力が完全に戻ってない。
だから無理にはお願いは避けようかと思う。まあ・・多分大丈夫
だけど」

もし・・例の組織が魔王クンドンを復活したら。今度は封印じゃ
なく

本気で行かないとやばいな・・。俺も魔力は完全ではないけど段々
回復しているけど・・今の状態で戦っても負けるだけだな。」
フラユンスさんが言う

「そうですね・・。私の魔力と同じなら結構やばいですね・・。
エリートクラスで私とティオ、ことりさんぐらいしかいません。
ことりさんを前に出すと危険ですから・・。結局私とティオの2
人で

例の組織を止めるしかないですね。最悪動きを封じるしか・・。」
キトさんが言う

「そうだな・・うちの搜索部隊の情報によると例の組織の名前は
グランマグという組織らしい。そのグランマグの司令塔があの・・

デスニーズらしい。今回は激しい戦いになるだろう。」

フラユンスさんが言うと

「そうですか・・・デスニーズか・・・闇使いのエリートクラスですね。私とセイさんぐらいが戦えるぐらいですね・・・ティオだと闇属性の対抗が難しいから・・・」

キトさんが言うと

「そうですね・・・なるべく私も闇抵抗をしたいのですが・・・」

ティオさんが言うと

「いや・・・それは難しいだろう。いつ現れるかもわからないから・・・」

しかも・・・私はともかくティオは支援魔法など覚えてるからまだね・・・」

キトさんが言うと

「まあ・・・それはともかく一応今回はこの辺で終わろう。セイたちが帰ってきたときに

会議を開くからよろしく頼むよ。」

フラユンスさんが言うと

「はい、分かりました。」

と言って2人は部屋を出た。

「これから長い戦いになりそうだな・・・。覚悟しないとな。」

フラユンスさんはつぶやいていた。

（第19章終わり）

雷遺跡に行く途中

俺とセイさんは氷遺跡でキャラロットに会いに行こうと行ってみましたが

まさかの大怪我をしているキャラロットさんを見た。

その後雷遺跡にいるサンダーバートも危ないと言うことで俺とセイさんは

急いで雷遺跡に向かった。一応キャラロットさんの傷はセイさんが魔法で傷を

癒したのですが……。このまま置いて行くとまたキャラロットさんに危険に

なるので俺と仮契約して現在リングの中にシャドウと一緒にいる。

「セイさんちよつと質問をしてもいいですか？」

急ぎながら俺は質問をした。

「私に答えられるなら。」

セイさんが言つて、

「例の組織ってなんですか？」

俺はキャラロットとセイさんの会話に疑問があつた。

「ああ……。そうだったね。では……。例の組織の前に今まであつたことを少し話すよ。」

山本さんは魔王クンドンって知ってるかい？」

セイさんが聞いてきたので

「はい……。一応ミーファさんから聞いたので少しは」

俺が答えると

「じゃあ……。話は早いかな。10年前ぐらいにね川崎さんが中学校時代だったかな？」

そのときユンさんは山本さんがいる世界と魔法世界のゲートをつなぎたかつたのよ。

もともと通れるんだけど先代魔法世界の王子はそのゲートを1回の

みしか許されなかったのよ

どっちかに行ったらもう戻ってこれないけどね。それをユンさんは何回でも行けるように

してただけど一応そこで川崎さんがいじめられててね助けたのがきっかけで2人は

仲良くなった。しかし・・その頃魔王クンドンは世界征服を企んでて魔力が高いユンさんを

捕まえ禁じられた魔法をしようとしていた。川崎さんはそれを知らなかった。しかし

元々ユンさんの結婚相手が川崎さんを助けを求め自らを杖に変えて川崎さんを託したんだ。

そして・・川崎さんは魔法世界に行きキトやティオと一緒に旅に出て魔王クンドンを

魔法が効かない次元に飛ばしたんだ。しかし・・その後魔王クンドンを次元から取り出そう

という組織がいてね私たちはそれを封じるためにいろんな遺跡に行ってクンドンの復活を

阻止したんだけど・・結局は復活してしまった。それをユンさんが全魔力を使って

魔王クンドンを倒した。だが・・それをまた復活しようという組織が最近作られたのを

知って何で復活するのが全く見当がつかなかった。だが・・今回でやっとわかった。」

セイさんが言うと

「精霊の魔力ですか？」

俺が言うと

「そう、精霊はユンさん以上の魔力を持っている。それを吸い取ればまた魔王クンドンを

復活するのは可能だ。だから今さっきキャラロットが大怪我したのはその組織だ。

その組織の名前はグランマグ。私たちの魔法と違って違う特殊で技を出す違う世界の住人だ。

それを今後私たちが戦う組織になりそうだ。だけどまだできたばかりだからそう簡単に

攻めてくるはずはないだろう。たぶん1年か2年だ。しかし私は聞いただけでどういうやつか

全く分らないけどね。」

セイさんは苦笑しながら俺たちは雷遺跡に向かった。 (第20章 終わり)

サンダーバード

もう少しで俺たちは雷遺跡に着く頃

「そういえば・・・キャラロット少し聞いてもいいか？」

セイさんが聞いてみて

「ああ・・・俺に答えられるなら。」

キャラロットが言うと

「じゃあ・・・キャラロットが戦った相手はどういうやつだった？」

セイさんが聞いて

「ああ、相手は男女で2人だったよ・・・男のほうはなんか木の実っぽいやつを

食って属性を変える能力だったかな・・・俺が見たときは炎属性だった。

まあ、女のほうは紙に色を塗った色で攻撃だったかな？」

キャラロットが答えたら

「そうか・・・じゃあグランマグは全属性を自由に変える能力者が多いのか。

少し厄介だけどまあ闇と光属性は使えないだろう。対策は十分にあるさ。

情報ありがとう。」

セイさんが言って

「いや・・・俺も男のほうにはダメージを与えたけど・・・2対1はちよつと

つらかった。しかも、相手は俺の苦手な炎で行きやがった・・・しかたないけど

もし・・・セイたちが来なかったら俺はもう・・・本当に助かった。

「キャラロットが言ったので

「それはちょうど来たときだったからよかったでしょう。それより

もうすぐ

雷遺跡につきますよ……ん？」

俺たちは雷遺跡に着いたときそこにいたのは大きな鳥がいた。

「どうした？サンダーバードこんなところにいたら危険が……」

セイさんが言う

「おゝセイ久しぶり。まあ・例の組織だろう？わかってる。さつき魔力の感じが

変わったから中にいたら余計に危ないと思ひ外に逃げたというわけさ。俺は外のほうが

戦いやすい。で……そちらの方は？」

サンダーバードが言う

「ああ、自己紹介遅れたね。この方は山本連暮さん珍しい闇使いの使い手でしかも天魔人」

セイさんが言う

「初めまして山本連暮です。セイさんが言った通り闇使いで天魔人ですが……

今は普通の人間ですよ。もう魔力がほとんどないので。」

俺は言った。

「そうですね。私はサンダーバードといいます。よろしく願ひしますね。」

サンダーバードは言った。

「で……サンダーバードは一緒に行きます？」

セイさんが言う

「そうですね。ここにいても危険ですし、そろそろ自分も契約者がいないとちょっと

やばいかもしれない。だから一緒に行くよ。」

といった。

「了解。じゃあまだ契約者はいないけど一応山本さんと仮契約していて急いで城に戻るから。」

セイさんが言う

「あいよ。というか僕が乗せて城まで飛ばうか」
サンダーバードは言って俺と仮契約をした。その後俺たちは一旦城に向かった。(第21章終わり)

全員集合 その1

俺たちはサンダーバードに乗せてもらい城までついた。

「おかえりなさい。セイ今から会議に出れるか？」

フラユンスさんが言って

「ええ、そのつもりで早く帰ってきましたから。山本さんはどうしますか？」

セイさんから言われて

「そうですね……。自分もあの場面を見ましたから自分ができるなら。」

俺はそう言った。

「じゃあ2人とも一緒に来て」

フラユンスさんが俺たちを案内して入った部屋にいたのは

「山本様こんにちは。」

ラファエルさんがいて、俺は頭を下げた。そして周りにいたのは

ラファエルさん、リディアさん、ミーファさんそして……。知らない方が2人いた。

「では……。緊急会議を開きます。現在ここにいる人たちは知ってるかと思いますが今後グランマグについて話していきます。その前に多分知らない人たちがいると思うので会議を始める前に少し自己紹介をしてから始めましょう。」

フラユンスさんが言って初めに言ったのは

「では、私から天界の王様をやっているラファエルと申します。よろしく願います。」

ラファエルさんが言って次は

「私はラファエル様の使いのリディアと申します。よろしく願います。」

リディアさんが言った。

「じゃあ次は俺だな俺は格闘精霊ミーファだ。よろしくな。」

ミーファさんが言つて次に自己紹介をしたのは

「私の名前は和代幹わしろみきといいます。超能力世界から来ました。
よろしく願います。」

「僕の名前は神代裕也かみしろゆうやです。和代と同じく超能力世界から来ました。
まだ戦いには慣れてませんがどうかよろしく願います。」

和代さん神代さんが言つた後

「では次は私ですね。私の名前はセイ・ライザといいます。私は光
属性の魔法師なのでどうかよろしく願います。」

セイさんは言つた。そして……

「初めまして私の名前は山本連暮といいます。よろしく願います。
」

俺が言つた後に

「じゃあ僕が最後だね。まあ……みんなも知つてと思うけど僕の名前はフラユンス・メディアです。魔法世界の王様だけどまだ未熟だからよろしくね。」

今回会議にいる全員が言い終わってフラユンス・メディアさんが
今後の話を言つたのであつた。
(第22章終わり)

全員集合 その2

「えーと一応今回は出れませんが一応今後参加する人でキトとテイオも入るから今後の緊急会議は僕を合わせて10人で話します。」
フラユンス・メディアさんが言っ

「今回はグランマグについての会議ということでもいいでしょうか？」

和代さんが言う

「そうですね。でもまだ最近その組織の名前が出てきたので何とも言えませんが早めの会議ということをお願いします。」

フラユンス・メディアさんが言う

「わかりました。」

和代さんが言

「では・・今回集まったのはさっきも言ったようにグランマグの目的がわかりました。それは精霊の力を吸い取って魔王クンドンを復活するという目的を。今現在精霊いるのは全世界で10種類しかいなくその中でも魔力が高い精霊がミーフア、シャドウ、キャラロット、サンダーバード、オリジンの5つの精霊が最も魔力が高くそして狙われやすい。そこで今回は精霊を守るために精霊契約とグランマグの対策そして戦闘するときの配置を考えようかと思いますがどうでしょうか？」

フラユンス・メディアさんが言う

「わかりました。」

ラファエルさんが言う

「ではまず・・元々は精霊は1人に1つがいいですが・・それだと危険だと思い2人で1つの精霊を契約しようと思います。精霊の方々いいですか？」

フラユンス・メディアさんが言う

「俺は問題ないぜ。」

「私も問題はありません。」

「自分は大丈夫です。」

「そのほうが安全でしょうね。」

「問題ない。」

5つの精霊は問題なく言った。

「では・まずサンダーバードから話していきましょう。雷属性を得意としているもので契約してくださる方はいらしゃいますか？」

フラユンス・メディアさんが言うと

「私と神代がよく使うので契約しても問題はないのでしますよ。」
2人が言つて

「じゃあ神代さんと和代さんよろしくね。次はオリジンだけど多分それはラファエルさんとセイが光属性の使い手だから2人はそれでいい？」

聞いてきたので2人は

「もともとオリジンの契約は私と契約してたので問題はないですよ。」

「私も問題はありません。」

2人は言つた。

「では次はキャラロットですね。氷属性の使い手はここにはいないですがティオが氷属性の使い手なので1人目はティオもう1人はキトにさせようかと思います。キャラロットそれでいいですか？励じやなくてごめんね。」

フラユンス・メディアさんはキャラロットに聞いてみた。

「ああ、あの2人なら問題はないさ。大丈夫俺ももう励には無理させたくはないから気にするな。」

キャラロットが言つた。

「ありがとう。では次はシャドウだね。全世界で闇と光属性の使い手はめつたにいないですがここに2人闇属性の使い手がいます。山本さんリディアさんシャドウの契約者になってくれませんか？」

フラユンス・メディアさんが言うと

「私は問題ないですよ。」

「自分も大丈夫です。」

俺たちはそう答えた。

「ありがとう。じゃあ最後にミーファだね。ミーファは格闘精霊だから俺と・・・」

フラユンス・メディアさんはちょっと考えてた。

「俺はユン様と山本様に契約してほしい。俺が見込んだ人だからな。」

ミーファが言うと

「山本さん大丈夫ですか？」

フラユンス・メディアさんが言うと

「うちは問題はないですよ。」

俺は言った。そして精霊の契約者が全部決まったのであった。（

第23章終わり）

全員集合 その3

「では・・契約について終わります。最後にグランマグが来た時の戦闘配置を

簡単に決めようかと思います。いいですか？」

フラユンス・メディアさんが言うともんな頷いた。

「これは完全に決めてないのでいくら変えても構いません。一応今情報によるとグランマグはまだ結成したばかりですがすぐに襲い掛かることはないでしょう。ですが・・私が聞いたところではグランマグの司令塔のデスニーズはラファエルさんぐらいのレベルの持ち主。その部下にあたるものは私やキト、ティオぐらいのレベルの持ち主が多いらしい。しかもデスニーズは閥属性の使い手しかも強力な魔力の持ち主だからみんな気をつけるように。一応戦闘配置は俺とラファエルさんはデスニーズをほかのみんなは各隊長を戦ってほしい。しかしそれだけでは多分こっちの戦闘力が不利可能性も十分にあると思うので無理だけはしないようにしてください。一応1年間は大丈夫だと思いますがいつでも戦闘態勢ができるように準備してください。いいでしょうか？」

フラユンス・メディアさんが言うともんな頷いた。

「では・・今回はこれぐらいにして終わりますよう。みんな長い会議ありがとうございました。何かあればこちらから伝えますので何かあれば連絡して下さい。では・・お疲れ様でした。」

フラユンス・メディアさんが言って会議は終わった。そして終わった後うちに来たのは

「初めまして山本さんさつき自己紹介をしました。和代と隣にいるのは神代といいます。長い付き合いですがよろしくお願いします。」
2人が挨拶をしたので

「こちらこそよろしくお願いします。」

俺も挨拶をしたのであった。

「では僕たちは自分たちの世界に戻ってみんなに報告しないといけないのでまたいつかお話をしましょう。では」

2人はそう言って部屋から出た。そして

「山本様今いいですか？」

ミーファからテレパシーが来た。

「大丈夫ですよ。どうしましたか？」

俺が言うと

「ちょっと中庭で少し話さないか？」

ミーファが言うと

「ええ・・・いいですよ。」

俺が言って中庭に行った。そして

「いつまで魔力制御リングをつけてるのだ？」

ミーファが突然言って

「やっぱり・・・いつからわかってました？」

俺は足と腕からリング4つを取り外した。

「やっぱりな。ほかのやつは敏感じゃないと気付かないと思うが俺とシャドウには

多分魔力を抑えてるだな。と考えてた。」

ミーファが言うと俺はリング4つをまたはめて

「そうですね・・・まあ・・・今はこれで修業をしているので・・・もっと魔力を高めないとおの時にみたいに魔力切れが激しいから・・・今回は魔力制御リングで魔力を低くしてどれだけ魔力を高めるか。そしてリングにいつでも魔力が使えるようにしないとリディアさんは援護魔法がお得意だけど援護魔法は魔力が必要なのでいざという時に渡そうかと思って・・・よくわかりましたね。」

俺が言うと

「そうだな・・・俺とシャドウは山本様と一緒にいる時間が多かったからわかると思う。まあ・・・無理だけはするなよ。俺とシャドウは山本様と契約をしているから少し魔力を吸っているから・・・。」

ミーファが言うと俺は

「そうですね・・気を付けます。1つ聞いてもいいですか？」

俺はミーファさんに聞くと

「俺に答えられるなら」

ミーファが言うと

「元々精霊は僕たちの召喚儀式で出しますが精霊は自分とのシンクロとかは可能ですか？」

俺が質問をしたら。

「んゝそれはできると思うが・・長時間すると俺たちの魔力がなくなるから多分短時間だけならできるぞ？山本様もしかして・・」

ミーファが言うと

「うん。もし危ないと思ったら一時的に2人とのシンクロをしようかと思う。しかも一気にやらないと自分の魔力もなくなってしまうから。無理だけはさせない。」

俺はミーファとシャドウに言う

「おう、じゃあ俺も山本様をかけてみるよ」

「私はマスターの指示に従います。」

ミーファとシャドウが言う

「ありがとう。でも危険な場合のみしか使わないから・・。」

俺はそういつて自分の部屋に戻るために中庭を去った。(第24

章終わり)

罰ゲーム？

「助けてくれ．．．」

俺は会議後みんなの前に戻ったんだけどなぜか女性陣につかまりしかもなぜか手錠っぽいやつを手に縛られた。

「勝手にいなくなるのは山君せいだからね！」

眞魅先輩が言つて

「いや．．俺は．．．」

俺は何とか説明をしようとしたけど．．まさか聞く耳を持たなかった。

まあ．．本当はフラユンスさんセイさんに助けてもらいたかったけども

フラユンスさんはキトさんやテイオさんと全体会議後個人会議をしていて

今現在いない。セイさんは急いで戻ったのでまだ見たい遺跡があるということ

なので今現在いない。本当は．．金崎と夏季坂に頼みたかったんだけど．．

「金崎．．夏季坂．．助けてよ．．．」

俺は少し2人の助けを呼んだ。しかし．．

「俺たちも山本を助けたいけど．．．ほら．．前にも言ったじゃん。俺たちが眞魅先輩達に行っても信じてくれないじゃん．．．だから．

．助けない気持ちにはわかるけど．．がんばれ．．．山本」

「ごめんね．．．僕たちが言っても説得力がないから．．．」

2人が言った。俺は

「そうか．．でも危なかったときは本当に助けてよ．．．」

俺は眞魅先輩達に聞こえないように2人にテレパシーで伝えた。

「さ．．て山君には罰ゲームをしてもらわないとね。」

眞魅先輩が言つと。俺はまず手錠を壊す方法を少し考えてたら

「あ、山本さん。これだけ言つときます。この手錠は魔力封じで使われる物で簡単に魔法では壊せなく。自力で壊すこともできない特注品なので無理はしないでね」

川崎さんの一言で俺はシヨックを食らった。

「んで・・・結局なにをすればいいでしょうか？」

俺は・・・少し落ち込みながら聞いてみた。

「んゝそうだね。みんなどうする？」

真魅先輩はみんなに聞いてみたらみんな考えてみて何も思いつかなかった。

その時1人みんなに提案を試してみた。

「んゝみんなで1つの罰ゲームっていうわけじゃなくて各1人ずつ決めたらどうでしょうか？」

高原さんが言った。それを聞いて

「いいじゃない？ねゝみんな。」

真魅先輩が言うともみんな頷いた。そしてみんな1人ずつ罰ゲームを考えた。

その時俺は・・・

「はあ・・・」

と少し考え事をしてみた。それは今後のこと。そうあのフラユンスさんが苦しめられた

魔王クンドンを復活をしようとしている組織グランマグとの戦い。

俺は結局戦闘に

参加するが・・・それをまたみんなに秘密にしておくかを考えていた。その後

30分かけてみんないい罰ゲームを決まったそうで俺はこの後全員の罰ゲームを

することになった。（第25章終わり）

その後・・・

結局俺は女性陣のお詫び（罰ゲームっぽい？）としてなんでも言うことを

聞くということになった。しかし一気にやるのは俺もさすがにちょっとと思いきや

指揮をとったのは高原さんで時間が空いたときに1人1回ずつということになった。

で・・・一応今俺はなぜか川崎さんの部屋にいる。なぜかというと。

「じゃあ〜私からでもいいですか？」

と先に言い出してみんな了承したらしく俺は川崎さんについていくことになり

そのまま部屋まで行くことになった。

「このままじゃきついよね。ちょっと待ってて。」

川崎さんが言う俺の手錠を外してくれた。

「これでよし。つとごめんね〜」

川崎さんが言うて

「いえ・・・悪いのは自分ですから。」

俺は言った。それを聞いて

「そうか〜まあ、私は楽しかったからいいけどね。だけど〜山本さんってみんなに好かれているんですね。いいなあ〜」

川崎さんが突然変なことを言われ

「・・・え？」

俺は啞然をした。それはそうだ・・・いきなり女性から言われるとは思ってもいなかったからだ。

「だってさ〜私はもうユン君しか好きな人がいなかったし・・・元々こっちに行く前の友達は女の子しか

作れなかったから・・・。こっちに来てユン君やキトさんに出会いそして・・・ユン君と結婚をしそして・・・山本さんと会えて本当に幸

せだよ。ほかの子を見ると私はたぶん全員山本さんが好きなのかな？と思ってるのよ。実際はどうなの？」

川崎さんから聞かれ

「そうですね……。一応高原と糰見からは告白されました。しかし・その時は俺は天魔人でいろんな

事件もあり、そういう時じゃなくしかも俺は結婚する気持ちはありませんから……。すいません。」

俺は川崎さんに謝った。しかし

「謝ることじゃないよ？だってそれでも川崎さんや糰見さんは今でも山本さんにいつも一緒にいるじゃない？それはまだ友達でもごくうれしくてだからいつでもチャンスがあれば告白すると思うよ。」

「
川崎さんは言った。」

「そうですね……。まあ・俺は今後どういう人生を踏むか全くわかりません。みんなが俺と友達でもいいっていうなら付き合いますし、俺は・・付き合ったことがないから・・何にも言えませんが好きな人が現れたらいつか・・」

俺はすこし・・黙った。

「そっかゝまあそれは山本さんが決めたらいいですよ。私も応援しますね！」

川崎さんが言った。

「ありがとうございます。」

俺は言った。というより・・少し疑問があり

「えゝと・・結局俺は川崎さんに何をすればいいのですか？」

俺は恐る恐る聞いてみた。そして返ってきた言葉は俺もびっくりしたのであった。（第26章終わり）

今後のこと

「私は山本さんをこの部屋に連れてきた訳はユン君のことについて聞きたいの。」

川崎さんは俺に聞いてきて

「俺で話せるなら・・・どうぞ。」

俺はそう言った。

「じゃあ・・・聞くな。山本さんから見て今ユン君の魔力ってどうなってるの?」

川崎さんが質問をしたので

「そうですね・・・魔力は前にあったときはラファエルさんクラスですが・・・最近では・・・少しずつ減っていつてるように見えます。」

俺は見たままを言った。

「そうですね・・・やっぱり魔力使いすぎたのかな・・・。私のために・・・あと2つ聞いてもいい?」

川崎さんが言ったので

「答えられる範囲であれば・・・。」

俺は言った。1つ目の質問は

「じゃあ・・・さっき緊急会議があったよね?なんで緊急会議があったのかを教えて。そして会議の内容もできれば教えてほしいかな?」

川崎さんが言ったので

「そうですね。俺が出かけた理由が精霊の歴史について知りたくセイさんに連れてもらいそのことを知ってたのはフラونسさんしか知らなかったと思いますよ。それで今回行くつもりだったのは氷遺跡と雷遺跡の2つだったらしく・・・。まず初めに氷遺跡から行ってみたら氷の精霊キャラロットが大怪我をしてまして・・・。僕もその時の状況は全くわかりませんでした。セイさんに聞くと最近精霊を狙う組織がいるらしくその名前も最近偵察部隊に調査したところに

よるとグランマグという組織だと後から聞かされました。一応キヤラロットさんの大怪我は命に係わるようなことではなくセイさんが光属性の回復魔法で何とかなりましてその後急いで雷遺跡に向かいサンダーバードさんに会いました。サンダーバードさんは無事だったため急いで戻ってきたわけです。」

俺は一旦遺跡に行ったことから城に戻るまでの話をした。

「そうだったのですね。キヤロさんが無事でよかった。」

川崎さんは少しほっとしていた。

「その後俺はフラユンスさんについて来て大会議をしました。今回については精霊キヤラロットさんが狙われたので今後についてでそれとキヤラロットさんとサンダーバードさんは契約者がいないのでその時に会議に出た人で契約者を決めました。1人では危ないので2人分の契約として……。キヤラロット、サンダーバード以外にはミーフア、オリジン、シャドウの5種精霊との契約後は緊急戦闘の場合の話が少しあったぐらいです。」

俺は簡単に説明をした。

「そうですね……。ありがとうございます。やっぱりユン君は私を危ない目に合わせないようにしてるんですね。山本さんありがとうございます。最後に1つだけ聞いてもいいですか？」

川崎さんが言った。

「ええ……。大丈夫ですよ？」

俺は答えた。

「では……。これは命令じゃないから……。多分私はユン君の魔力をもらって今の魔法が使えるの。だけどね私はもう魔法なくっても別にいいのよ。ユン君が私のために魔力を供給してくれるのはうれしいけどユン君が魔法が使えなくなるのがいやなのよ……。だから……。もし……。ユン君が危ないときがあった場合は」

私が止められないと思うから山本さんお願いします……。」

川崎さんは涙を流しながら言った。

「わかりました。僕でよければ。絶対にフラユンスさんを無茶なこ

とはさせませんので。」

俺が言つてこのまま数分黙つた。その後俺は自分の部屋に戻つたのであつた。(第27章終わり)

帰宅

俺たちは4日間お世話になろうかと思ったんだが
いろんなことが起こり早めに帰ることになった。

「いろいろお世話になりました。」

俺はフラユンスさんに挨拶をした。

「いえいえ、こちらこそこの3日間楽しかったですよ。またぜひ来て下さいね。」

フラユンスさんが言って

「……はい……」

女性陣は元気な挨拶をした。フラユンスさんが俺に近づき

「何かあればいつでも相談してください。あと……ミーフアとシャドウをお願いします。」

小声で言った。

「はい、わかりました。何かあればすぐに連絡します。」

俺も小声で言った。

「まあ……お土産というものはあんまりないのですが……。これを」
キトさんとテイオさんが魔法に使う杖などを渡した。

「金崎さんと夏季坂さんだいぶ上手になったのでこれを渡しときます。一応これは2人が使ってたものですのでまたいつか魔法訓練で
しましょう。」

キトさんが言った。

「はい！ありがとうございます。」

「いい経験になりました。本当にありがとうございます。」
金崎と夏季坂が言った。

「私のほうは……みなさんに魔法を教えてないのでこれを渡しても
困ると思います。私は帽子とネックレスをプレゼントします。これは
お互い魔法で作られた品で何かあれば守ってくれるでしょう。」
テイオさんがそう言って女性陣に1人ずつネックレスと帽子を渡し

た。

「……ありがとうございます！大切にしますね！」

女性陣は言った。

「では、そろそろ行きましょうか。」

ラファエルさんが言って呪文を準備したとき

「あ、少し待ってください。」

セイさんが言った。

「山本さんにこれを……。」「

セイさんからもらったものは……。かなり古い本。

「これは精霊についての歴史関係です。山本さんは歴史関係が好きだそうで、今回はばたしましたがいずれはゆっくりと遺跡巡りをしましょう。」

セイさんが言って

「わかりました。また行きましょうね。」

俺は言った。

「じゃあいいかな？」

ラファエルさんが言って

「お願いします。」

俺が言った。そして俺たちは魔法世界を後にしたのであった。

（

第28章終わり）

帰宅（後書き）

これで第2部の魔法世界（旅行編？）は終わります。
今後誤字脱字がありますが温かく見守ってください。では

魔法世界後

「到着〜」

ラファエルさんが言って

「ありがとうございます。」

俺が言った。

「気にするな。まあ、みんなは楽しめたか？」

ラファエルさんが聞いたので

「……はい！」「……」

女性陣が笑顔で言った。

「元気があっていいな〜。まあ、また行きたかったら連れてってあげるよ。まあ〜天界にも遊びに来てくれるとうれしいかな〜。」

ラファエルさんが言った。そして

「さてと帰る前にコレット今日はどうする？」

ラファエルさんがコレットに質問をして

「えーと……今日はこっちで泊まりたいです。」

コレットが言った。それを聞いて

「そかそか〜まあ、今日はこっちで泊まっていから明日には帰ってくるのだぞ？明日から少し忙しくなるから覚悟しておいてね〜。」

ラファエルさんが笑いながら言った。

「もし・何かあれば遠慮なく俺にも相談してくれ。今回の事件は精霊に関してもあるが、たぶん奴らは山本さんを狙う可能性もあるだろう。だから気を付けてくれ。」

ラファエルさんが俺に小声で言ったので

「はい、わかりました。ありがとうございました。」

俺は小声でお礼をした。

「じゃあ俺は帰る！またね〜」

と言ってラファエルさんは天界に帰った。そして数分が立って

「……じゃあ私たちも家に帰るね。」「」

糰見と眞魅先輩が言った。

「お疲れ様でした。学校があるのにつれてきてごめんね。」
俺は言った。しかし

「気にしないの。だって山君と一緒に旅行ができるから楽しみだったから。まあ、明日から学校だから大変だけどこれぐらいの時間は知り合いにノートを見せてもらえば大丈夫だから。ね。糰見ちゃん」

眞魅先輩が言って

「はい、私も一緒に行きたかったわけですし・・・楽しかったので別に問題はありませんよ。」
糰見が言った。

「ではではみなさんまたね」

眞魅先輩が言って2人は各自家に帰った。

残ったのは俺、高原さん、コレット、金崎、夏季坂の4人が残った。

「コレットはどこに泊まるの？」

俺はコレットに質問をした。

「できれば・・・山さんの所に泊まりたいな・・・。っと思ひまして」

コレットが言った。俺は

「みんなそれでいい？」

俺は3人に聞いてみたら

「私は大丈夫よ？」

高原さんが言った。

「あ、俺は一旦家に帰るわ。今日は家で泊まるから。いつも山本の家泊まってね。」

金崎が言った。

「僕も魔法世界のお土産を家族に渡すから一旦家に戻るよ。だから今日は戻らないから大丈夫よ」

夏季坂が言って

「わかった。金崎、夏季坂お疲れ様。」

俺は2人に言って

「お疲れ」

2人は言って各自家に帰った。残ったのは俺と高原さんとコレットの3人。

「いや・・まで・・2人が帰ったのはいいが・・男1人女2人じゃん・・。」

俺は帰った後に気づき少し心の中で落ち込んだ。そして

「じゃあ俺たちも帰ろうか。」

俺が2人に行って

「うん！」

2人は答えて俺たちは家に帰ったのであった。 (第29章終わり)

到着

「ただいま」

俺たちは魔法世界から帰ってきて今家に着いたのであった。

「おじゃまします」

コレットが挨拶して玄関に入ったのであった。そして

「じゃあ、今から風呂を入れるから2人は先に入ってゆつくりして俺は夕ご飯の食材を買ってきてから料理を振る舞うから。」

俺は言った。そして

「料理なら・・・私が・・・」

高原さんが言うと

「いや。今日はもう旅行で疲れたでしょ？俺は大丈夫だから先に旅行の疲れを取ったほうがいい。だから今日は俺が料理作るから。それでいいかい？」

俺が言うと高原さんがうなずいた。そして俺は風呂を入れてから買い物に出かけた。

「2人にはいろいろ迷惑かけたからな、今日は豪華にしないと。何しよう。」

俺は考えてスーパーに寄った。そして材料を買い家に帰って料理を作った。そして作ったのはあじのマリネ、サラダ、キノコの味噌汁、ご飯、そしてデザートでケーキを作った。

「ごちそうさまでした」

2人は満足し、俺は皿などを洗い1人でお風呂を入った。

「ふっ、いい気持ちだな」

俺は風呂に入って極楽気分だった。少し考えた。それは・・・

「シャドウ、ミーファさん聞こえますか？」

俺はシャドウ、ミーファにテレパシーをした。

「何でしょうか？マスター」

「聞こえているよ、どうしたの？」

シャドウ、ミーファが返事をしたので

「昨日話した会議は大体いつ頃に攻めてくるかわかるか？」

俺が質問をしたら

「そりゃー相手が力をつけてきたら攻めてくるんだろっねーけど・簡単に攻めてきたらユン王子に負けるだろっねーまだできたばかりだし。多分来るとしたら早くて半年か1年、遅くて2年には来るだろっね。」

ミーファが答えてくれたので

「そうですか・ありがとうございます。で・もしシンクロするときは何分ぐらい持ちそう？」

俺はもう1度ミーファに言った。

「そうですね・・・。短くて10分長くて30分でしょうね。やったことがないのでわかりませんが」

ミーファが言っ

「そうかーありがとうございます。まあ、多分シンクロは使わないつもりだから」

俺は言っ

「俺は・マスターを守るならこの精霊の力を与えてもいい。」

シャドウが言っ

「ありがと。シャドウ。まあ・・無理だけはしないようにするよ。2人ともこんな遅い時間に声をかけてごめんね。」

俺がシャドウ、ミーファに言っ

「いえー精霊は寝ないから何かあればいつでもどうぞー」

「マスターの悩みはシャドウの悩みだから気にしないで」

シャドウとミーファが言っ

「そうか・じゃあ・俺も鍛えないとやばいな・・。」

俺は独り言を言っ

た。
(第30章終わり)

焦る山本

いきなり入ってきたのはコレットだった。

「ど・・どうしたの??」

俺はすぐ焦ってコレットに言った。

「山さんに少し聞いてみたいことがありますて。」

突然コレットが言い出して俺は

「いいけど・・まあ、もうちょっと待っててね風呂に上がってから着替えて俺の部屋まで来てくれるか?その時でいいなら話聞くよ?」

俺は言った。それを聞いて

「わかりました。では後で。」

コレットはそう言って風呂場から離れた。

「ふう・・焦った・・。」

俺は少し焦った。そりやそうさいきなり女の子が男が入ってる風呂場に入ってくるなんて予想もなかったと思うぞ・・本当に・・。俺は出る前に風呂の掃除をして着替え自分の部屋に来た。そして5分後にコレットがノックした。

「山さんいますか?」

コレットが言い出すと

「ああ、どうぞ、入って」

俺が言ってコレットは部屋に入った。

「どこでもいいから座って」

俺が言うと

「失礼します。」

コレットが礼をしてベットに座った。そして・・

「俺に話ってなん?」

俺はコレットが聞きたいことを聞いた。そして

「山さんはまた戦いに出るのですか?」

コレットが突然言い出したので

「なんでそう思うの？」

俺はコレットに質問を返した。

「それは・・・私の勘ですが・・・また山さんがいなくなりそうで怖いのです。」

コレットはそう言った。

「そうか・・・やっぱり女の子の勘って鋭いだね。」

俺は苦笑いで言った。

「やっぱり戦いに出るのですね・・・。」

コレット入った。俺は

「ああ、そうだ。俺は完全にまた戦いに参加するだろう。まだ決ま
ってないがね。」

俺はコレットに言った。それを聞いて

「わかりました。ですが・・・今から私の質問に答えてもらえませんか？」

コレットが言ったら俺は

「わかった。俺が答えられることなら」

俺はそう言ってその後コレットの質問を受けることになった。

（

第31章終わり）

コレットの質問タイム

コレットの質問を受けることになった俺はコレットが質問するまで少し黙ってた。

「今回の戦いは長くなるの？」

1つ目の質問が来た。

「それは・・・わからない・・・。だけど早ければ半年遅くて2、3年だと思うよ。」

俺はわかる範囲で答えた。

「わかりました。次は今回は聞かれてないことが多いので・・・。まず何かあったか教えてください。」

2つ目の質問が来たので俺は

「そうですね・・・。これは川崎さんにも同じことを聞かれましたが・・・。多分ラファエルさんは娘を戦いに巻き込まないようにしているでしょう。しかもまだ王女修行のコレットの魔力じゃ相手に勝つのがきついと思うから。まあ、話は戻しますが今回の目的は魔王クンドンを復活する組織がいるらしくその組織は精霊の力を吸収し次元にいる魔王クンドンを出し世界征服を企むのを防ぐので結成された俺はそのことを知らずにセイさんと一緒に遺跡巡りをした途中で精霊を狙う組織から攻撃を受けた精霊にあったのでその時に初めて知りました。そして早めに戻った時クンドンを復活させないように今後の課題を話し合うために緊急会議を開かれた。もちろん俺は関係ないと思ったんだけどその時の状況見たし、組織の狙いについても教えてくださったので参加することしかなかったんだ。その組織はグランマグと言って魔法じゃない特殊能力者の集団っていうことが分かった。そして・・・今後の課題はまだあるけども一応決まったのは精霊の契約を1人じゃなく2人つということ俺は一応ミーファとシャドウを契約しているよ。あとは俺は魔力が完全に回復してないのでグランマグの下っ端と戦うことになるだろう。」

俺はコレットに魔力を完全に回復してないと嘘をついた。

「そうですか・・わかりました。でも・・やっぱり・・私はその戦いに参加できないでしょうか？」

コレットが俺に質問をしたので

「俺に言われてもな・・。一応今回の軸になるのはラファエルさんとフラユンスさんなので・・一応フラユンスさんも川崎さんには黙ってたんだ。多分ラファエルさんも同じことを考えてるだろうと俺は思うよ。だって大切な人を戦いに巻き込みたくないという気持ちは僕にもわかるから・・。」

俺はコレットに答えた。

「だけどね・・私も山さんに無理だけはしたくないの・・。お願い・・戦いに参加しないで・・。」

コレットは涙を流しながら俺に説得をした。

「元々はそういう場面を見てなければ参加しなかったはずよ。けどね・・魔王クンドンはラファエルさんと同じぐらいかそれ以上の魔力の持ち主らしい。ユラユンスさんも無茶をして魔法が使えない次元に飛ばすのにも大変だったらしい。だから今のユラユンスさんは魔力が低下していて無茶をすれば命に係わるかもしれない。そしてもしユラユンスさんが戦いを不可能になった場合魔王クンドンと戦うのはラファエルさんだけだよ。しかも魔王クンドンを阻止する前にグランマグと戦うことだし・・魔力の消費は激しい。だからそれを和らげるために俺は参加することを決心したわけだ。」

俺は答えた。そして

「わかりました・・。けど1つ私と約束してもいいですか？」

コレットは言った。俺は

「わかりました。俺が守れることならば・・。」

俺は言ってコレットは

「全員無事で帰ってきてください。もちろん山さんも。人がなくなるとそれを待っていた人はとても悲しい気持ちになるので・・。お願いします。」

それを聞いて俺は

「わかった・・それはもちろん約束をするよ。絶対に誰も死なせないから。」

俺はそう言って

「ありがとうございます・・ではちょっと私中庭に言って風に当たてきますね。」

コレットは言った。

「わかった。だけど今日は外寒いから気を付けてね」

俺は言ってコレットは部屋を出た。数分して

「ふう・・じゃあ俺もリビングに行くかの」

といって俺はリビングに向かった。（第32章終わり）

嫌な予感

俺はコレットに質問を答えた後リビングで少しのんびりしてた。

そして・・・後から2人もリビングに来たので俺は

「んじゃ俺は疲れたから寝るわ。2人とも疲れてるはずだから早めに寝ないといかんぞ？ああ、コレットは空いてる部屋を使ってくれ。高原さんもいつもの部屋を使ってくれ。」

俺は2人に言って部屋に行こうとしたとき

「ええ」

という言葉そしてなんか鋭い視線を俺に向かって2人がいて俺はそのままスルーとして部屋に戻った。

俺は部屋に行って少し旅行バックの中身を全部出してきれいにして

「さて、寝るか」

俺はベットに入り深い眠りについた。その後俺は知らずに2人は

「どうする？」

「一緒に行く？」

「うん。どっち側に寝る？」

「私はどっちでもいいよ？」

「じゃあ私は右側でコレットちゃんは左側でいい？」

「うん。いいよ。でも山さん気づかれないかな？」

「んゝわからない・・・。だけど気づかれたときにはちゃんと言おう。」

「

「そうですね。」

2人はここそリビングで相談をし、各自一旦部屋に戻り俺の部屋に集まった。

「じゃあ・・・入ろうか」

「うん。」

2人はドアをそとあけて

「失礼します」

2人は入って俺のベットの前まで来て

「山さんの寝顔かわいいですね」

「そうでしょう。つい・・抱きしめたいっと思うだよね」

2人は俺が深い眠りをしてるところを見てすぐくうれしそうだった。

「じゃあ寝ましようか。」

「うん。」

2人は俺の両側に入り2人とも寝た。そして・・朝6時

「ふあゝよく寝た」。

俺は起きた時に何か感触に当たり両側を見たら2人が寝ていて

「おいおい・・まじかよ・・。まあ・・仕方ないか。んじゃ俺は着替えてランニングしてくるかな」

俺は慎重にベットから出て2人とも布団から少しはみ出たので毛布をかけて俺は着替えを

持つていきリビングで着替えランニングに出たのであった。その後なぜか

2人に怒られたのは次の話で。

（第33章終わり）

なぜ・・・？

俺は2人が一緒に寝てるのを気づいたのは朝5時だった。

そのままそとベットから出てリビングに着替え外に行っていつものメニューのランニングをした。ランニングの時間？

んゝそうだなゝ大体1時間程度かな？前までは30分で5キロくらい走っていたんだけどそれじゃ足りないと思いもう30分伸ばして1時間で走っていた。

コースは家から8キロ近くにある海岸があるのでそこまで走ってそのまま戻ってくる

単純なコース。今日も明るい太陽を見て帰ってきたわけですが・・。家に帰りランニング後のシャワーを浴びその後朝ごはんを作る途中に高原さんとコレットが来て

「あゝ・・もう！」

2人に言われ俺は

「・・・え？」

俺は啞然をしてしまった・・。その後俺はなぜか正座をされて

「なぜ・・・？俺は正座を？」

俺は2人に質問をした。

「山さん勝手にやらないで・・」

高原さんが言つて

「私も一緒に行きたかったのに・・・」

コレットが言った。俺は・・まだ理解ができなく少し考えた。

その結果は2人はなぜ怒ったかというと、まずコレットから多分俺と一緒にランニングしたかったんだろぅな・・と思った。

高原さんのほうは勝手に朝ごはんを作ったことだと思つた。

いつも高原さんに朝ごはん作ってもらってるからねゝ。

「ごめんな。コレット起こさなく勝手にランニング行ってしまうて、多分コレットが行きたい気持ちはすぐわかるんだけど旅行の疲れで

ゆつくりさせたかったから。高原さんも旅行で疲れてるから2人にはゆつくりしてもらいたかったから」

俺は2人に言ったらなぜか2人とも赤くなり

「山さんが・・私のために・・」

「そうでしたか・・・今回は許します。」

2人は言った。というか高原さん・・許します・・ってここうちの家だよ？

まあ・・結局許しが出たので俺たちは朝ごはんを食べた

「んゝやつぱり山本さんの料理はおいしいですね・・さすが・・です。」

と高原さんが言うと

「そうか？いつも通りに作ってるだけなんだけど・・・」
俺は言った。

「いいなー私ももつと山さんの料理食べたい」

コレットが言うと

「ん？こんな感じでよければ言ってくれば作ってあげるよ？というか・・店でこんな感じで作ってるし・・」

俺が言って

「ありがとうございます。その時はよろしくね」

コレットが言った。そして俺たちは会話しながら朝ごはんを食べた

(第34章終わり)

コレット帰り後

朝ごはんを食べた後

「それじゃ・・・私はここで・・・」

コレットが言うと

「コレットあつちでも頑張れよな。」

俺はコレットに言うと

「うん！ありがとう山さん。山さんたちもまたいつか遊びに来てよ。まあ・・・まずは大学に受かってほしいけどね。頑張つて！」

コレットが言うと

「ありがとうなコレット。だけど・・・たぶん高原さんは受かると思うよ・・・。完全に俺たちは頑張つて大学に受かるよ。」

俺が言ったら

「ひどい・・・。山さんって最初から私だけが受かると確信するなんて・・・。」

高原さんが言つて

「まあ・・・だつてさ・・・高原さんって優秀すぎてね・・・。ごめんごめん」

俺が高原さんに謝つてたら

「いいですね・・・。私もこういう会話したいですね・・・。」

コレットが言つて

「あはは・・・まあ、またいつか天界にも遊びに行くから」

俺が言ったら

「うん！待ってるからね！」

コレットが言つてコレットは天界にワープ（レポート）した。

「さてと・・・」

俺は部屋のほうに向かうと

「山本さん今日バイトですか？」

高原さんが言つて

「うん。さつき店長から来て人手が足りないから来てくれっといわれてね。高原さんもいくか？」

俺が言ったら

「うん」

高原さんが言つて

「だけど・・・厨房だけは駄目だよ。」

俺が高原さんに一言言つた。それを聞いて

「えっ・・・どうしても厨房はだめなの？」

高原さんが言つて俺は

「だめ。高原さんがいると厨房にいる人たちがちゃんとしてくれないから。高原さんはホールをするなら一緒に連れて行くけどそれでもいやだ。というなら俺1人で行くから。」

俺は言つて、少し考えた結果は

「んーじゃあホールでいいよ。行こうー山本さん」

高原さんが言つて

「了解つとじゃあ行くか」

俺たちはバイト先に向かった。

（第35章終わり）

バイト先で

俺と高原さんはバイト先に行つて

「お疲れ様です」

俺は言つて最初に声をかけたのは

「お。来たか山本。すまんゝ急に人手足りなくてよ……。山本以外にも頼んだんだけど……。駄目でさ……。山本に頼るしかないんだよ……。お？高原ちゃんも来てくれたんだ。ありがとう」
店長が俺たちに挨拶してくれたので

「いえいえ。人手が足りないのは仕方ないですよ……。うちも数日休みをもらいましたし……。前にもかなり休んでしまったお詫びとして来てるので……。うちでよければいつでも。まあ、高原さんは今回はホールでお願いします。厨房だと。厨房をやつてる人がちゃんとしなと思うので」

俺が言うと

「はは……。さすがにそうだね。高原ちゃんはここの看板娘になつてしまったからの……。他の男子がみてもな。見ちゃうし仕事をしてもらわないといけないからね……。」

店長が苦笑いした。

「そんなわけで今日はよろしく願います。」

俺は頭を下げた。その日は結構お客が多かった。たぶん半分は高原さんを見に来てると思う……。

それを思つたのはたぶん俺と店長だけ……。まあ……。高原さんには言わないでおこう。

「お疲れ。今日は助かったよ……。ありがとうな。」

店長が言うと

「いえいえ。お役にたててよかったです。」

俺が言うと

「私も楽しかったです。また行つてもいいですか？」

高原さんがいうと

「おう！いつでも来ていいさ。大歓迎！おつと山本。夕飯は食っていくか？」

店長が言うと

「え・・・いいですか？」

俺が言うと

「おう。だけど・・・残り物の食材だけど・・・それでもいいか？」

店長が苦笑いだっただけど

「大丈夫です。久しぶりに店長の料理食べたかったですから」

俺が言うと

「はは、ありがとうな。そういつてもらえるとうれしいさ。ちょっと待ってる。」

店長が言っけキッチンに入った。そして外を見ると雨が降っけいき

「あらま・・・雨が降っけきたね」

高原さんが言っけ

「そっだな・・・」

俺が言っけたときに突然

「助っけ・・・」

助っけてという声がしたので

「今助っけてという声しなかつたか？」

俺が言っけ

「え・・・？私には何にも・・・」

高原さんが言っけてまた・・・

「だれか・・・たすけて・・・」

という声がして俺は高原さんに

「やっぱり声がする。ちよっけと言っけてくるから先に食っけてて」

俺が言っけ店の外に出たら

「あ・・・ちよっけ待っけて・・・」

高原さんが言っけただけけど俺はその声には聞っけてなくそのまま助っけてという方向に

向かって走ったのであった。

（第36章終わり）

雨の中で

「はあはあ・・・どこだ・・・」

俺は助けてと言う声を聞いて店から出てその声を探していた。

「助けて・・・。」

声が聞こえたので俺はその声に向かって探してたら小さな男の子を発見し

「どうしたんだい？僕」

俺は小さな男の子に声をかけたら

「あのね・・・妹を助けて・・・。」

男の子が涙を流しながらお願いをしてきたので

「まずね・・・泣いても困るだけだな・・・一応何があつたか教えてくれる？」

俺は事情を聞こうとしたら

「さっきまで親に内緒で2人で川で遊んでいたら急に雨が降ってきて・・・一緒に川から出ようとしたときに津波が襲ってきて妹が流されて言っただけ・・・僕にはどうにもできなかった・・・」

男の子が言っと

「よし、分かったじゃあ、お兄さんに任せろ。僕の名前教えてくれる？」

俺は男の子の名前を聞くと

「たくや・・・。」

男の子が言っと

「じゃあたくや君に頼みたいことがあるいい？」

俺が言っとたくやはうなずいた。

「よし、じゃあ俺は今から女の子を探しに行くからたくやは誰かを捕まえて助けを呼んでくれ。いい？」

俺が言っとたくやはうなずいて

「よし、頼んだぞ！」

俺は言い、たくやが教えてくれた川まで走って行った。しかしながら・・川の流れが速く

「これは・・困ったな・・」

俺はそう思い少し走って行った。その時

「誰かゝ助けて・・。」

と言う声を聞いたので俺はその声に走って行った。

その時女の子が倒れた木の枝をつかみ・・流れないようにしていた。しかし・・

「あの子の体力が危ない・・」

俺はそう思い急いで女の子を助けに行った。しかし・・女の子に近づいたときに

枝が折れて流れて行って俺は急いで水に潜り女の子を捕まえ何とか川から脱出した。

「はあはあ・・きみ大丈夫？」

俺が女の子に質問をすると

「あ・・ありがとう・・お兄ちゃん」

女の子が泣きながら俺を抱きしめその後無事を知らせるため俺たちはそこに待った。（第37章終わり）

か・・・風邪？

俺は無事女の子を助け他の人が女の子を探してたので女の子を預け俺は家に帰った。全身ぬれていたの・・・

「お風呂入るか・・・」

俺は風呂場に行きシャワーを浴びて上ろうとしたら少しふらふらだったので

「ああ・・・風邪かな・・・。」

と思い俺は一旦リビングに行った。

「あ、山本さんおかえりなさい。雨大丈夫だった？」

高原さんがいたので

「ああ・・・大丈夫。くしゅん」

俺はくしゃみをして

「大丈夫？」

高原さんが心配そうに見えたので

「多分大丈夫と思うからそのまま寝るわ」

俺はそう伝えて部屋に戻りゆっくりと寝た。

俺が寝てる間に・・・。

「デスニーズ様」

1人の女性が現れ

「おう。ご苦労だったな。で、どうだったか？天魔人の力は」

デスニーズが言う

「天魔人の力は使ってませんが、私の感じた魔力はやはり魔界人の戦いで弱くなったものと」

女性が言う

「そうか・・・まあ・・・俺は天魔人の力がほしい。だからもうすぐ私が天魔人と交渉してみるか」

デスニーズが言う

「そうですか・・・。」

女性が言う

「あ、そうだ。エンリは見つけたか？」

デスニーズは質問をした。

「いえ・・天魔人しかいませんでした。」

女性が言う

「そうか。まあよい。俺はあいつは信用してないからの。」

デスニーズが言う

「あらまゝ。でもエンリは偵察で有名な方では？」

女性が言う

「まあ・・そうだな。まあ、見つけたら連れ戻すだけだよ。まあ、君は下がってよい」

デスニーズが言う

「分かりました。失礼します。」

女性が離れる

「さて・・俺もそろそろ動きですか。天魔人山本あなたの力を話 hands」

デスニーズはそう思いながら自分で笑いかけたのであった。（第

38章終わり）

起き上がれない・・・

「くしゅん」

俺は現在ベットで寝ていた。昨日の雨で子供を助けるために俺は川の中を飛び込んだからだ。

そして・・・現在6時普通なら毎朝のジョギングをしているはずだ・・・。

「おとなしく今日は寝とくか」

俺はそう思いそのまま寝た。そして・・・朝8時

「山本さん遅いなあ〜いつもならリビングにいるんだけどどうしたのかな？」

高原さんが疑問に思い玄関へそして

「あれ？靴がある。今日は行かなかったのかな？」

疑問に思い高原さんは俺の部屋へ

「失礼します〜」

高原さんが入っていくとベットの中で俺は少し汗をかきながら寝ていて

「風邪かな？まあ・・・氷枕用意しないとね」

高原さんがそう言いながら一旦リビングに戻り氷枕を作って部屋に戻った。

そして俺の枕を氷枕と入れ替えて俺は目を覚まし

「高原さん・・・？」

と言った。それを聞いて高原さんは

「もう、山本さん雨の中びしょ濡れで帰ってきて・・・風邪ですね。

今日は休んでて」

高原さんが言っと

「そうする・・・。」

俺は反論なしで言った。

「お粥でも作るけど食べれる？」

高原さんが言うつと

「今はいいかな・・・眠い。」

俺はぼそつと言った。

「分かりました。まあ・・・次起きたらお粥作りますからね。いいですネ?」

高原さんが言うつと

「了解」

俺はそう言うつと目をつぶつて眠った。その後3時間後俺は目を覚めたときに隣には高原さんが居て

「ず」とそばにいたの?」

俺は言うつと

「もちろん」山本さんお粥食べます?」

高原さんが言うつと

「ああ・・・お願いします。」

俺が言った。そしてそれを聞いて高原さんが一旦部屋から出て10分後お粥を作ってくれたしかし・・・

「フーフ、はい、山本さん。あゝん」

高原さんが言うつと

「どうしてもやらないといけないの?」

俺が言うつと

「だって1回やってみたかったんだもん」駄目?」

高原さんが言うつと

「はあ・・・仕方ない今日は高原さんに任せるよ」

俺が言うつと

「わゝいありがとう。じゃあゝはい、あゝん」

俺は今日は高原さんに任せた。お粥を食べた後俺は薬を飲んでまた寝た。

そして7時間後起きてたらなぜかベットの隣に高原さんが寝ていて「乙女心は難しいな・・・」

俺はそう言うつと高原さんが寝言で

「山本さん・・・」

と楽しそうな夢を見ていたので

「まあ・・・こういう日も悪くないか。今日はありがとう高原さん」

俺はそう言つと一応服を着替えてまた眠つたのであった。(第3

9章終わり)

対戦！デスニーズ その1

「んじゃ行ってくるね」

風邪が治った俺はバイトに行くので高原さんに行った。

「はい、バイト終わったら早く帰ってきてね。」

高原さんが言うのと俺はバイトに出かけた。バイトが終わり家に帰ると

「あなたが天魔人山本さんですね？」

渋い声の男が聞こえたので俺は振り向いて

「そうだけど、誰だ?!」

俺は言ったら周りが別次元に飛ばされていた。そしてある男が俺の前に現れ

「初めまして、私はデスニーズと言います。お初ですね。」

デスニーズは挨拶をした。

「グランマグの司令塔デスニーズさんがうちに何か用ですか？」

俺はデスニーズに質問をした。

「おやおや。私の名前を知ってたんですね。ありがたい。私はあなたにスカウトに来たんですよ。」

デスニーズが言うところ

「スカウト？」

俺は言った。

「私たちは強い力の持ち主を集め魔王クンドン様を復活し全世界を征服したいのですよ。」

デスニーズが言うところ

「俺がもし断ると言ったら？」

俺が言うところ

「そうですね。最悪力づく山本さんを倒し天魔人の力を手に入れるだけです。」

デスニーズが言った。それを聞いて俺はテレパシーを使おうとしたら「あ、そうそう。ここでは通信とかはできないから応援は呼べませ

んよ？」

デスニーズが言うと

「そうですか・・・で、俺が仲間になったら何をする気だ？」

俺は質問をした。

「そうですね。一番お願いしたいのは相手の情報を聞きたいですね。それとあなたの精霊をもらいたいですね。」

デスニーズが言うと

「じゃあ・・・断るかな。俺はあるところに帰りたいから」

俺は魔力をためた。

「残念です。まあ・・・力づくであなたを連れていきますがね。」

デスニーズが言った。そのとき

「山本さん遅いなあ」

高原さんが言うと、少し気配を感じ

「この魔力は・・・まさか・・・山本さんがあぶない・・・。」

高原さんは急いで準備して家を出たのであった。（第40章終わり）

対戦！デスニーズ その2

「いくぞ・・・」

俺は魔力をためデスニーズに向かった。デスニーズは魔力をため

「ダークミスト」

魔法を唱え周りが霧になった。

「闇使いか・・・」

俺はぽそつと声を出した。

「そうだ。私は山本さんと同じ闇使いの者だ。もう1度聞く、このまま俺の仲間にならないか？」

デスニーズが言った。それを聞いた俺は考えることもなく「断る！」

と言った。俺の言葉を聞いて

「それは残念ですね。では・・・力づくで連れて行きますか。」
デスニーズはそう言っただけ魔力をためた。

一方そのころ

「私だけじゃ・・・何にもできない・・・どうしよう。」

高原さんは走りながら考えてた。

「そうだ・・・あの人なら・・・」

高原さんは走りを止め魔力を高めた。

「フラユンスさん、ラファエルさんいますでしょうか？」

高原さんはテレパシーでフラユンスさんとラファエルさんに声をかけた。

「この声は高原さん？」

「いますよ？どうしたのですか？テレパシーを使うなんて」

2人はびっくりした。高原さんは冷静に

「お願いします。山本さんを助けてください。今山本さんはデスニーズと戦ってるはずですよ。」

高原さんは2人に言うと

「何だつて?! どうして・・・。」

2人はびっくりして高原さんに聞いた。

「皆さんに黙ってすいません・・・。私は元デスニーズの部下だったんです。」

高原さんは2人に言った。そして

「2人にグランマグ組織の場所と今から起きることをすべて話します。信じるかどうかは分かりませんが・・・。ですが・・・お願いです・・・。山本さんを助けてください。」

高原さんは2人に頼んだ。

「分かった。俺もすぐに行くから」

「ありがとう。高原さん。高原さんも無理しないでね。山本さんが悲しむから」

2人は答えた。それを聞いて

「ありがとうございます・・・。ですが・・・。もう私はここに居られません、なぜなら私はデスニーズを裏切ったから。その償いをしないといけないので・・・。山本さんがいる場所は・・・。」

高原さんは2人に場所を伝えテレパシーを切った。そして山本がいる場所まで全速力で走った。
(第41章終わり)

対戦！デスニーズ その3

「はあはあ・・・」

俺は倒れた。

「天魔人の力はこんなもんか。まあ・・・仕方ないな。」

デスニーズが言った。なぜ俺が倒れたのかと言うと。数十分の事

「さあゝあなたの天魔人の力を見せてくれ」

デスニーズが言った。俺は魔力をためて

「ダークフレイム！」

黒い炎をデスニーズに攻撃を仕掛けた。しかし・・・

「そんなもんか・・・。悲しいなゝ最強の魔法で攻撃してみてよ」

デスニーズが挑発したので俺は

「うち・・・」

俺は今の力では勝てないと思い逃げようと魔力を溜め翼を出して逃げ出した。しかし

「おやおや。逃げ出すとは・・・。まあゝ逃がさないけどね」

デスニーズが言うとも魔力を溜め

「キングミスト」

逃げ出す俺の周りがかかり白い霧に囲まれどんどん魔力が吸い取られてきて俺は倒れた。

「この魔法はお互い数分だが魔力を吸い取るやつでねゝ魔力がない奴はすぐに魔力切れするのよ」

デスニーズが言うと

「くそ・・・。」

俺は悔しがった。そして・・・。

「では・・・あなたを気絶させて私の所に連れて来ましょうか。」

デスニーズは魔力を高め

「サンダーボール」

雷の玉が俺の所に飛んできた。

「もう・・・駄目か・・・」

俺はあきらめた。そのとき

「ミラーシールド!」

女の声が聞こえ俺の前に光鏡が立ちサンダーボールを吸収した。

「おやおや。これはエンリではありませんか? いや、今では高原だつたかな?」

デスニーズが言うと

「高原さんなぜここに?」

俺は高原さんに聞いた。

「ごめんなさい。私はあなたをだましたの。でも・・・今はあなたを助けるから」

高原さんは笑顔で言った。そして

「デスニーズさん今山本さんより私のほうが必要では?」

高原さんがデスニーズに言った。

「んゝそうですね。まあ・・・あなたの目的は天魔人の力を観察してその技を私に報告ですからね」

デスニーズが言うと

「じゃあ・・・今回は私が戻りますから・・・。」

高原さんが言うと

「まあ・・・いいでしょう。今天魔人の力は私には使えないからね。エリスの力をもらいましょう。」

デスニーズが言うと高原さんが俺に

「今までありがとう・・・。そして、さようなら・・・山本さん」

高原さんが言つてデスニーズと一緒に消えて言った。そして俺は「くそう・・・。」

涙を流しながらそこにいた。

(第42章終わり)

ラファエルさんから・・・

俺が目覚めたときそこにいたのはラファエルさんとフラユンス・メディアさんがいた。

「大丈夫ですか？山本様」

「どこか痛むところはありませんか？」

2人は心配したので

「大丈夫です・・・。ありがとうございます。しかし・・・なぜ2人が？」

俺はラファエルさん達に質問をした。

「それは私が答えましょう。山本さんがデスニーズと戦う途中に私とフラユンス・メディアさんにあるテレパシーが来ましてね。それが高原さんだったのよ。高原さんは今までのことを私たちに教えてくれたんだ。それは・・・魔界人との戦いの途中からデスニーズから天魔人の能力を手に入れたということとで高原さんを山本さんに近づき偵察をするように命じられたんだ。しかし・・・私たちも高原さんと近くにいると違和感がなかったんだ。それは・・・高原さんも超能力者で魔力を持たない人だったんだ。高原さんの能力は人の技を見ると使えるというかなり珍しい能力らしくデスニーズは偵察させ自分の手下である高原さんを戦えるように仕向けたらしい。しかし・・・最初は高原さんもその気だったんだけど・・・段々と山本さんと生活をしてみて戦うことを無くしいつでも山本さんと生活で来たらいいあゝと言う感じでデスニーズとの報告をしなくなったそうだ。そして・・・デスニーズの魔力を感知し、自分の力ではだめだと思い私たちに連絡をしたわけだ。」

ラファエルさんが言うつと

「そうですね・・・。」

俺はちよつとショックを受けた。

「しかし・・・ちよつと急がないとやばいと感じたんだよね。」

フラユンス・メディアさんが言うと

「それはどういうことですか？」

俺はフラユンス・メディアさんに聞いた。

「さっきも言ったように高原さんは人の技を一目見るだけで技が使えるのよ。だけど？部のぞいてね。それは・・・精霊を呼べないことと精霊の技は使えないこと。だけど・・・高原さんは魔界人の戦いで私たちが見てないところで見ていたら？」

フラユンス・メディアさんが俺に質問をした。

「ということは・・・自分達の技が高原さんが使えるということですか？」

俺が答えると

「そう言うことになるね。だけど魔力が使えない分弱い魔法だと体の負担はかなり軽いけど強大な魔力を使い過ぎると・・・高原さんの体が持たないね・・・」

フラユンス・メディアさんは俺に辛い言葉を言われた。

「山本さんは高原さんを助けたいですか？」

ラファエルさんが言うと

「それはもちろんです。」

俺は答えた。

「まあ・・・まだ対策はあるから今から言うことは大切なことを言うね。」

ラファエルさんが言って俺たちは今後のことについて話し合ったのである。

（第43章終わり）

今後・・・

「では・・・。今後について少し話すね。」

ラファエルさんが言う

「お願いします。」

俺は言った。

「では、高原さんが言うにはデスニーズは人の魔力を吸収して自分の物にする力があるそう。もちろん魔力を吸収することはその人の得意技も吸収できるというわけだ。しかし・・・その吸収されたものは魔力が無くなりそのまま生きるかもしれない・・・なくなるかという危険な状態だ。だが、高原さんはその術を使うのに早くても1時間しかかるといふらしくそれまでデスニーズは戦闘には参加できない。と言うことは1年間の時間があるということはない？」

ラファエルさんが言う

「それは・・・まだ高原さんを助けることができるのですか？」

俺が言う

「そう。しかも我々の目標デスニーズを倒し、魔王クンドンの復活もさせないということも可能だ。しかし山本さんも戦って分かったと思うけどデスニーズは魔界人との戦いで山本さんクラス以上のレベルだ。デスニーズがそれぐらいだとその部下も私たちの魔力がそれ以上が多いだろう。だから・・・。私たちは数日後全体会議をすることになった。そして、1年までにお互いの能力を理解してからデスニーズがいる場所に乗り込むつもりだ。場所も高原さんから教えてくれた。あの子は本当に山本さんを助けたかったんでしょ。だから今度は山本さんが助ける番ですよ。」

ラファエルさんが言う

「そうですね。今度は自分が・・・」

俺が言う

「じゃあ・・・また一緒に鍛えよう。数日後また山本さんを我が魔法世

界に招待するのでそっちのほうで訓練しませんか？」

フラユンス・メディアさんが言った。

「そうですね……。自分はまだまだ弱いですから……。よろしくお願ひします。」

俺は頭を下げた。

「それじゃ簡単な話は終わりました。では……。そろそろ私たちは・・。」

ラファエルさんが言うと

「ありがとうございます。」

俺は2人に挨拶すると2人はそれぞれの世界に戻った。
(第4章
4章終わり)

旅たち

「こんなものでいいか」

俺は旅たちの準備をしていた。もちろん高原さんを助けるために。

「ピンポン」

チャイムが鳴ったので俺は

「どちら様ですか？」

声を出して玄関に向かった。そして

「金崎だよ」

金崎から声が来て

「お？どうした？」

ドアを開けるとそこにいたのは金崎と夏季坂の2人がいた。

「今日からお世話になるうかと思ってさ、いいか？」

金崎が言うと

「ああ・・別にかまわないが俺は明日からちょっと用事で出かけるよ。」

俺は言うと

「ああ、ラファエルさんから話は聞いた。まずは入ってもいいか？」

金崎が言うと

「分かった。入って」

俺は2人を通した。そして3人でリビングに入って適当に座った。

そして・・・

「んで・・ラファエルさんから話を聞いたんですが・・・。山本は助けに行くんだね？」

夏季坂が言うと

「ああ・・。高原さんは俺のせいで連れて行かれたから・・。俺が助けないとな。」

俺が言うと・・・

「それは違うと思うけどな」

金崎が言うつと

「え？」

俺は少し啞然をした。

「だって・・確かに高原さんは連れて行かれた。だけど・・山本のせいで連れて行かれたわけじゃないよ。高原さんは山本が好きだから助けたいから自分で行ったんじゃないかな？自分を犠牲にしてまで高原さんは山本のことが好きで大切な人を守りたいという気持ちがあつて。」

金崎が言うつと

「そうだね・・金崎ありがとう。」

俺が言うつと

「照れくさいから」気にするなよ！まあ、多分コレットさん達に言わなく勝手に行くした後で厄介だから俺と夏季坂がここに居て山本は安心して高原さんを助けに行け！まあ・・多分コレットとリオはすぐにはれると思うけど真魅先輩などは明日か明後日には多分来るだろうから俺から話しく。多分真魅先輩のことだから他の人にも伝え『私たちも助けに行きたいです！』とか言いそうだけど一応ラファエルさんには伝えてある。まあ、もちろん戦闘には参加できないが魔法世界に行くことだけは了承もらったよ。まあ、安心して行つて来い。多分俺らも後で来ると思うから役に立たないけどな。」

金崎が言うつと

「うんうん。行つてきて山本。俺たちは力になれないけど応援だけならできる。だけど無茶だけはしないでね。悲しむ人がいるから・・

・。

夏季坂が言った。

「ありがとう・・。2人ともよろしく頼む。」

俺は2人に頭を下げ俺は明日から魔法世界に旅立った。

（第45

章終わり）

旅たち（後書き）

これで日常生活編は終わりです

再び魔法世界へ

「じゃあ・・行ってくるね」

俺は金崎と夏季坂に言った。

「おう！無茶だけはするなよ。」

「加奈子さん達には自分達から説得するから安心して。」

2人は言った。

「ああ、すまん。2人とも」

俺は頭を下げた。

「気にするなつて！まあ・・多分真魅先輩とかは完全に魔法世界に行くと言っだろつし多分あつちでも会うかもしれないけど一応ラファエルさんには許可をもらってるから・・。」

金崎が言うつと

「ああ、助かるよ・・。いろいろとすまん。んじゃ言ってくる。」

俺は2人に挨拶すると

「「いつてらしゃい」」

2人が言うつと俺は魔法世界に飛びだつた。魔法世界に着いた途端

「お待ちしてました。山本様」

俺の前にいたのはラファエルさん、フラユンス・メディア、川崎さん、リディアさんの4人がいた。

「これからいろいろお世話になります。」

俺は頭を下げた。

「こちらこそ、これから忙しくなりますが・・。よろしく願います。」

代表としてフラユンス・メディアさんが言った。

「山本さんには今後の課題としていろんな属性を慣れるまでいろんな人とたたかってもらいます。もちろん全力でも構いませんので・・。」

ラファエルさんが言うつと

「はい、よろしくお願いします。」

俺が言うと

「で・・・来たばかりで悪いが・・・。この後全体会議をする
ことになったんだけど・・・山本さんは参加できますか？」

フラユンス・メディアさんが言うと

「はい！ぜひ参加させてください。」

俺は頭を下げた。

「では、会議室へ向かいましょう」

フラユンス・メディアさんが言うと

「では・・・荷物は私がもちますね」

リディアさんが俺のバックを取った。

「いつも・・・ありがとうございます。」

俺はリディアさんにお礼を言うと

「いえ・・・これも仕事ですから・・・。前にも助けてもらったお礼だ
と思ってください。」

リディアさんが言って俺たちは会議室へ向かった。（第46章終

わり）

作戦会議

「では・・・第2回目の会議を始めたいと思います。」

フラユンス・メディアさんが言つて会議が始まった。

「今回はデスニーズが現れたことにより急遽会議を開きました。では今回の無いようにしててですが・・・。」

フラユンス・メディアさんが進行を進めると

「ちよつといいですか？」

神代さんが手を挙げた。

「どうぞ。神代さん」

フラユンス・メディアさんが言うつと

「いきなりで申し訳ないのですが・・・山本さんに質問をいくつかしてもよろしいでしょうか？」

神代さんが言うつと

「自分でよければ」

俺が言つた。そして

「では・・・1つ目あなたはデスニーズとたたかいましたが・・・我々一度もデスニーズの能力を知りません。そして高原さんの能力も・・・。ですので対戦した山本さんにデスニーズと戦いどういう攻撃をしてきたのかを教えてください。」

神代さんが言うつと

「高原さん能力は知りませんが・・・。デスニーズの能力と言うよりうちが感じたのはうちと同じ闇使いの使い手と言うことしか・・・ですが・・・闇属性で相手の魔力を吸う力は始めてみました。」

俺は戦つたことについて少し話した。

「そうですね・・・貴重な意見をありがとうございます。多分予想される能力は相手の能力（魔力）を吸収して自分のものにする力ですね。これは厄介ですね・・・。ラファエルさんメディアさん一応この対策はうちと幹で任せてもらえませんか？」

神代さんが言うつと

「そうですね。魔法ならうちらで対策はできますが・・・超能力となると・・・神代姉妹に頼んだほうがいいですね」

ラファエルさんが言うつと

「僕もそう思います。神代さんよろしくお願いします。」

フラユンス・メディアさんが言った。その後今後について話し合った。
(第47章終わり)

対策？！

「え」とまずは・・・相手は魔法吸収なのでこちらの対策は武道を鍛えたほうがいいと思います。」

神代さんが言うともみんなが注目した。そして

「なぜ武道なのですか？」

リディアさんが言う

「まず、超能力との戦いでは魔法との差が激しいのです。魔法は下級魔法から上級魔法までいろいろありますが、しかし・・・使えるのは限度があります。しかしながら超能力者は使う代償があれば何回でも使うことができるのです。んー簡単に言えば私ならこの本に願いを込めれば使えるのですが代償はほんのペース数が減るのでこの1冊分だと・・・200ページあるので200回までは技ができるのです。なので超能力者と戦うなら魔法だけならまず、デスニースにも勝てずそのうえデスニースの部下にも勝てないと私は考えたのです。」

神代さんが言う

「では・・・今後の課題は・・・全員武道を極めるということでよろしいでしょうか？」

ラファエルさんが言う

「そうですね・・・いきなり武道をやってない人には時間がかかるでしょうし・・・武器とか使う人なら・・・武道中心で鍛えてもらいましょう。」

神代さんが言う

「わかりました。では、今後の課題について話します。」

フラユンス・メディアさんが言った。

「まず・・・私たちはデスニースが技を完成する前に相手の城に攻めるために武器とか持たない方は魔法を武器でも対抗できる方は武道を中心として各自お願いします。一応攻める機関は早めに攻めたほ

うがいいはずなので半年に攻めるのでそれまで各自よろしく願います。」

フラユンス・メディアさんが言って1回解散した。みんな各世界に戻ると

「山本さん少しよろしいですか？」

神代さんが言うと、

「はい。なんでしょう？」

俺が言うと

「山本さんのデータを少し調べてもらいましたが山本さんは格闘中心で鍛えてるんですね。」

神代さんが言うと

「ええ・・ラファエルさんとミーフアさんに鍛えてもらったので俺が言くと神代さんが

「一番この中で重要な役割を山本さんに任せてもよろしいでしょうか？」

神代さんが言うと

「え・・」

俺は啞然をした。少ししたら

「姉さん急にいうと山本さんもびつくりするよ・・・。」

和代さんが言った。

「え・・姉さん？」

俺はそのことでもびつくりした。

「あゝ言い忘れたね。私と和代さんは姉妹なんだゝ和代さんの名前が男っぽい名前になってますが。

私が小さいときに両親が離婚したから別々の名字になったわけ。まあ・・知ってるのはラファエルさんとフラユンス・メディアさんだけだね。さっきも言ってたよ。私たちは苦笑いでしたが・・アハハ」

2人は少し苦笑いをしていた。そして・・俺は重要なことを任されるだけ

大丈夫なのか？とか少し思ったのであった。

（第48章終わり）

対策?! (後書き)

かなり更新を遅れてすいませんでした。 > m () m <
まあ・・・言い訳になりますが・・・。

バイト・・・&学校のレポート課題など忙しくて・・・。
なるべく早めに更新できるよう頑張ります。

重要な役

「まあ・・・この中で運動神経＆魔力が高いのは山本さんもしくはラファエルさんがいいけど・・・」

ラファエルさんは多分相手から狙われることが多いから私たちは山本さんを推薦したの。一応山本さんは相手にも知られてるけど相手はそこまで強く感じてないはず。だって・・・山本さん本気出してなかったでしょ？」

神代さんが言うつと

「え・・・なぜ？」

俺は焦った。なぜわかるのかと。

「だって・・・今までのデータを見るとどうしても今山本さんの魔力は戻ってるはずだから・・・。フラユンス・メディアさんの場合は例外ですがふつう1年ぐらいすると魔力は戻るもしくはそれ以上になっているはず。ですが・・・山本さんは今の魔力ではデスニーズには1発も打撃を与えられないはず。そのわけは魔力を使わなかった。もしくは魔力を使えなかった。と私は思うのですが・・・違いますか？」

和代さんが言うつと

「せ・・・正解です。」

俺は2人の予想を当てられ手首についているリング2つを取り出した。

「やっぱり・・・このリングはリディアさんの特性リングですね。今の魔力だとデスニーズともかくそれ以上の魔力になりますね。ですが・・・気を付けてください。話を聞いているとデスニーズは相手の魔力を自分の力に変えて戦うという戦法なので魔力が高いほど危ないのでできるだけ私たちがサポートしますので頑張ってください。」

神代さんが言うつと

「ありがとうございます。」

俺はリングを付けた。

「ですが・・なんで特性リングをつけてるのですか？」
和代さんがいうと

「そうですね・・あえて言うなら川崎さんかな？」

俺が言うと

「王女様ですか・・」

神代さんが言うと

「川崎さんはフラユンス・メディアさんの魔力で魔法が使えます。
ですが・・それがあからフラユンス・メディアさんはどんな魔力が弱くなっております。そのために川崎さんは魔法を使わないようにしているのですが・・もしのために自分の魔力を使ってもらおうとして魔力をためているのです。」

俺は2人に言う

「そうですね・・優しいですね。まあ・・本番では外してくださいね。
無理をすると我々も大変なので」

和代さんがいうと

「わかりました。」

俺は2人に言った。

「では・・私たちはここで・・。」

2人はそう言っ自分の世界に戻った。

（第49章終わり）

そして半年後

「みんな準備いいか？」

ラファエルさんが言うつと

「「おゝ」」

とみんな言った。各自この半年でいろいろやってきた。そして今総勢で1000人いる。

元々はもつと増やしたかったが・・そんなにいては仲間を巻き込むという

フラユンス・メディアさんの考えであつて魔法世界から200人天界から200人超能力から600人

そのわけは相手は元々超能力者だからどこまでいけるかわからないがこの人数でいいだろうと

神代さん達が提案したのであつた。そして相手の上官を倒す役割はラファエルさん、フラユンス・メディアさん、神代さん、和代さん、テイオさん、キトさん、セイさん

そしてデスニーズ対策&高原さんを助ける役目を俺になった。

サポート役でリディアさん、川崎さん、コレット、リオになった。

本当はサポート役はリディアさんだけなはずなんだけど・・・、川崎さんは

フラユンス・メディアさんに頼んで無理だけはしないことを約束で参加となつた。

リオとコレットはラファエルさんに頼んでた。だけど・・本当は参加させたくなかつた

ラファエルさんは今回は戦うのではなく治療班とサポート班のみ許されたのであつた。

「んじゃ言ってくるね」

俺はみんなに言った。

「おう！絶対に無事に高原さんと一緒に帰ってこい！」

「無理だけはしないで頑張って！うちらはここで見守るしかできないが・・・」

夏季坂と金崎が言うと

「ありがとうな。絶対に高原さんを助けるから。」

俺は2人に言った。

「帰ってきたら盛大にパーティを開こう！私料理作るからね！」

真魅先輩が言った。

「あはは・・・楽しみにしとくよ。」

俺は苦笑いをした。

「無理だけはしないでね・・・」

糰見は少し震えてたから

「大丈夫だよ。糰見前見たいなことはしないから。」

俺は糰見に安心させる言葉をかけた。

「山ちゃん絶対に負けないでね！」

加奈子が言った。

「おう！ありがとう加奈子。頑張ってくるわ」

俺はみんなの言葉をもらい

「では山本さん行きましようか。」

神代さんに言われ俺たちはデスニーズがいる場所に行った。（第5

0章終わり）

いざ！グランマグへ その1

「ここが・・グランマグですね。」
俺が言うと

「そうですね・・危険なおいが・・しますが・・行きますよ！」
ラファエルさんが言うとなんな一斉に突撃した。まあ、当然ながら敵は現れお互いぶつかった。

俺含む8人はグランマグの中に侵入した。そして・・

「やっぱり分かれ道ですね・・。」

フラユンス・メディアさんが言うとなんちの前には3つの扉があった。

「どれが当たりでしょうか・・。」

ティオさんが言うとな

「ん〜そうですね・・まあ・・ある程度は予想しましたが・・・これは3つに分けないと行けませんね。」

神代さんが言うとな

「そうですね〜どうやってわけましょうか。」

ラファエルさんが言うとな

「では私が決めさせてもよろしいですか？」

和代さんが言うとな

「どうぞ。」

キトさんが言うてみんながうなずいた。

「では、右のドアは私と神代で行きます。中央のドアはラファエルさん、セイさん山本さんでそして左のドアはフラユンス・メディアさん、キトさん、ティオさんで行きましょう」

和代さんが言うとな

「この分け方は相手に対抗できるチーム&精霊契約者ですね。」
ラファエルさんが言うとな

「ええ、そうですね。それぞれ各精霊2名ずつ契約してる人を合わせ

ました。フラユンス・メディア

さんはどの属性の精霊でも契約は可能なのでキトさんテイオさんのチームに入れました。皆さんはこのチームで問題はありませんか？」和代さんが言う

「「「「問題はないです」「」「」」」」

みんな納得した。各チームはドアの前に立ち

「みんな健闘を祈る。そしてどのチームがデスニーズと戦ってもいいようにこの回復薬を渡します。皆さん無事でまた会いましょう！」

ラファエルさんが言う

各チームはドアの中に進んだ。

（第51章終わり）

いざ！グランマゲへ その2

私和代と神代は右のドアに入った。

「初めまして」

1人の男の方が私たちの前にあった。

「私は菅藤かんどうと申します。デスニーズの四天王とよんだほうがいいでしょうか？」

菅藤と言う男は挨拶をした。そして

「私はデスニーズ様がある術を邪魔する人を止める係でしてね・・・
。仕方ないですがあなた方を

ここで倒れてもらわないと困るので行きますよ。」

菅藤はナツクルを手をつけて戦闘態勢しました。

「神代準備はいい？」

「OK」

2人も戦闘態勢をした。そしてお互いぶつかった。

「では～行きますよ～」

菅藤が拳を神代に攻撃をしたんだが神代はよけた。

「こんな攻撃当たるかよ。」

神代さんが言う

「それはどうでしょうね」

菅藤が行った後

「ぐは・・・」

神代さんが飛んで行った。

「神代～大丈夫？」

和代さんが言う

「あなたも食らったときなさい。」

菅藤が拳で攻撃して和代さんがよけた数秒後

「きゃ～・・・」

神代さんも倒れた。

「ふう・・・これで2人は戦闘不能つと」

菅藤が言つと

「おい・・・俺らをなめるじゃねーよ」

菅藤の後ろに立ったのは神代さんと和代さんだった

「あらまー普通ならそこで気絶なんですがね・・・」

菅藤が言つと

「まあ・・・普通に戦つてたらな。うちらにとっては1回食らえば大体分かる何だよ。」

和代さんが言つと

「そうね。まあ・・・まさかあなたの能力が空気弾だとは思つてもいなかったけどこれなら私たちより弱いことが分かるわ」

神代さんが言つと

「お前らうちをなめているのか？」

菅藤が言つと

「ああ、この一発でわかるさ」

神代さんが言つと神代さんの周りに黒いオーラが溜まっていた

「空気弾はまだ弱い能力だ。今から俺が使うのは空気弾よりはるかに強大な弾だから覚悟しとけよ」

神代さんが言つて菅藤に飛びかかった。

「俺の名前は和代裕也だーよく覚えとけ！ナックルパンチ！」

俺は軽く殴った時菅藤は吹っ飛んで壁に激突して気絶した。

「ふう」

神代さんが言つと

「お疲れ裕也」

和代さんが言つと

「ありがとう姉さん。じゃあ進もうか」

神代さんが言つと2人は奥の扉に向かって行つた。

わり）

（第52章終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200r/>

学生時代 今までありがとう・・・

2011年11月17日20時33分発行